

目次(クリックで推移。番号と題は独自に付与)

1. 今は昔 2. 夜這い 3. 無理難題
 4. 石作皇子 5. 車持皇子 6. 阿倍御主人 7. 大伴御行 8. 石上麻呂 9. 帝
 10. 月見 11. 徒勞 12. 降臨 13. 汝幼き人 14. 羽衣 15. 不死の薬

文章 竹取物語 (国民文庫)
 番号 文字数: 約18700(原稿約47枚。注除く)

竹とりの翁物語 (群書類従)
 文字数: 約18300(約46枚)

1. 今は昔

- | | | |
|------|---------------------------------|-------------------------------|
| [1] | 今は昔 | 今はむかし。 |
| [2] | 竹取の翁といふものありけり。 | 竹とりの翁といふものありけり。 |
| [3] | 野山にまじりて、竹をとりつゝ、 萬の事につかひけり。 | 野にまじりて竹をとりつゝ 萬の事につかひけり。 |
| [4] | 名をば讃岐造磨と なんいひける。 | 名をばさぬ(るイ)きの宮つこと なむいひける。 |
| [5] | その竹の中に、 本光る竹ひとすぢありけり。 | 其竹の中に 本光る竹なむ一すぢ有けり。 |
| [6] | 怪しがりて寄りて見るに、 | あやしがりて寄て見るに。 |
| [7] | 筒の中ひかりたり。 | つゝの中ひかりたり。 |
| [8] | それを見れば、 三寸ばかりなる人いと美しくて居たり。 | それを見れば 三寸ばかりなる人いとつくしうてゐたり。 |
| [9] | 翁いふやう、 | 翁云やう。 |
| [10] | 「われ朝ごと夕ごとに見る、 竹の中におはするにて知りぬ、 | 我朝毎夕毎にみる 竹の中におはするにてしりぬ。 |
| [11] | 子になり給ふべき人なぬめり。」とて、 | 子になりたまふべき人なぬめりとて。 |
| [12] | 手にうち入れて家にもてきぬ。 | 手に打入て家に(へイ)もちて來ぬ。 |
| [13] | 妻の嫗にあづけて養はず。 | めの女にあづけてやしなはず。 |
| [14] | 美しきこと限なし。 | うつくしき事限なし。 |
| [15] | いと幼ければ 籠に入れて養ふ。 | いとおさなければ こ(はこイ、籠)に入てやしなふ。 |
| [16] | 竹取の翁 | 竹とりの・(翁イ)竹をとるに。 |
| [17] | この子を見つけて後に、竹をとるに、 | 此子を見つけて後に竹とるに。 |
| [18] | よ毎に、金ある竹を見つくること重りぬ。 | よごとにこがねある竹を見つくる事かさなりぬ。 |
| [19] | かくて翁やう／＼豊になりゆく。 | かくておきなやうやうゆかたになり行。 |
| [20] | この兒養ふほどに、 すく／＼と大になりまさる。 | この兒やしなふほどに すくすくとおほきになり増る。 |
| [21] | 三月ばかりになる程に、 よきほどなる人になりぬれば、 | 三月計の内に よきほどなる人になりぬれば。 |
| [22] | 髪上などさだして、 | かみあげなどさう(たい)じて。 |
| [23] | 髪上させせ裳着(もぎ)す。 | かみあげさせも(裳)きす。 |
| [24] | 帳(ちやう)の内よりも出さず、 | ちやうのうちよりもいださず。 |
| [25] | いつきかしづき養ふほどに、 | いつきかしづきやしなふ。 |
| [26] | この兒のかたち 清(けう)らなること世になく、 | 此兒のかたちの けさう(けうらい)なる事よになく。 |
| [27] | 家の内は暗き處なく光満ちたり。 | 屋のうちは闇き所なく光満ちたり。 |
| [28] | 翁心地あしく苦しき時も、 | 翁心あしく候へし時も。 |
| [29] | この子を見れば苦しき事も止みぬ。 | 此子を見ればくるしき事もやみぬ。 |
| [30] | 腹だたしきことも慰みけり。 | 腹だたしくあることもなぐさみけり。 |

- | | | |
|------|------------------------------------|----------------------------|
| [31] | 翁竹をとること久しくなりぬ。 | 翁竹をとる事久敷成ぬ。 |
| [32] | 勢猛の者になりけり。 | いきほひまう(猛)の物に成にけり。 |
| [33] | この子いと大になりぬれば、 | 此子いと大きに成ぬれば。 |
| [34] | 名をば 三室戸齋部秋田を呼びつけさす。 | なを みむろどいむべのあきたを喚てつけさす。 |
| [35] | 秋田なよ竹のかぐや姫とつけつ。 | あきたなよ竹のかぐや姫とつけつれ。 |
| [36] | このほど三日うちあげ遊ぶ。 | 此ほど三日打あげあそぶ。 |
| [37] | 萬の遊をぞしける。 | 萬のあそびをぞしける。 |
| [38] | 男女(をとこをうな)きはらず呼び集へて、 いとかしこくあそぶ。 | 男はうけきはらずよびつどへて かしこくあそぶ。 |

2. 夜這い

- | | | |
|------|--|--|
| [39] | 世界の男(をのこ)、 | 世かいのをのこ。 |
| [40] | 責なるも賤しきも、 | あてなるもいやしきも |
| [41] | 「いかでこのかぐや姫を得てしがな、 見てしがな。」と、音に聞きめでて惑ふ。 | いかで此かぐや姫をえてしがな。 見てしがなと音に聞愛てまどふ。 |
| [42] | その傍(あたりの) | 其あたりの |
| [43] | 垣にも家のとにも居(を)る人だに、 | 垣にも家の戸にもをる人だに。 |
| [44] | 容易(たはやす)く見るまじきものを、 | たはやすくみるまじき物を。 |
| [45] | 夜は安きいもねず、 | 夜はやすきいもねず。 |
| [46] | 闇の夜に出でても穴を抉(くじ)り、 こゝかしこより覗き垣間見惑ひあへり。 | 闇の夜にも こゝかしこよりのぞきかいまみまどひあへり。 |
| [47] | さる時よりなんよばひとはいひける。 | さる時よりなん夜ばひとは云ける。 |
| [48] | 人の物ともせぬ處に惑ひありけれども、 | 人も物ともせぬ所にまどひありけれども。 |
| [49] | 何の効(しるし)あるべくも見えず。 | 何のしるしあるべくも見えず。 |
| [50] | 家の人どもに 物をだに言はんとていひかくれども、 こととせせず。 | 家の人どもに 物をだにいはんとていひかくれども。 こととせせず。 |
| [51] | 傍を離れぬ公達、 | あたりをはなれぬきんだち。 |
| [52] | 夜を明し日を暮す人多かり。 | 夜をあかし日をくらす人おほかり。 |
| [53] | 愚なる人は、 | をろかなる人は。 |
| [54] | 「益(やう)なき歩行(ありき)は よしなかりけり。」とて、來ずなりにけり。 | ようなきありきは よしなかりけりとて こず成にけり。 |
| [55] | その中に猶いひけるは、 | その中になを云けるは。 |
| [56] | 色好といはるゝかぎり五人、 | 色好みといはるゝ限五人。 |
| [57] | 思ひ止む時なく夜晝來けり。 | 思ひやむ時なく夜ひる來けり。 |
| [58] | その名 | 其名ども。 |
| [59] | 一人は石作皇子、 | 石作りの御子。 |
| [60] | 一人は車持(くらもち)皇子、 | くらもちの御子。 |
| [61] | 一人は右大臣阿倍御主人(みうし)、 | 左大臣安倍のみむらじ。 |
| [62] | 一人は大納言大伴御行、 | 大納言大とも(伴イ)のみゆき。 |
| [63] | 一人は中納言石上(いそかみ)麿呂、 | 中納言いそのかみのもろたり(かイ)。 |
| [64] | たゞこの人々なりけり。 | 此人々なりけり。 |
| [65] | 世の中に多かる人をだに、 | 世中におほかる人をだに。 |
| [66] | 少しもかたちよしと聞きては、 | すこしも形よしと聞ては。 |
| [67] | 見まほしうする人々なりければ、 | 見まほしくする人ども(たちイ)也ければ。 |
| [68] | かぐや姫を見まほしうして、 | かのかぐや姫をみまほしくて。 |
| [69] | 物も食はず思ひつゝ、 | 物もくはず思ひつゝ。 |
| [70] | かの家に行きてたゞすみありきけれども、 かひあるべくもあらず。 | かの家に行てたゞすみありきけれども(イ无) かひあるべくもあらず。 |

竹取物語

- | | | |
|-------|---------------------------------------|----------------------------------|
| [71] | 文を書きてやれども、返事もせず、 | 文を書てやれども返事もせず。 |
| [72] | わび歌など書きて遣れども、 かへしもせず。 | 侘歌など書てをこすれども。 |
| [73] | 「かひなし。」と思へども、 | かひなしと思へど。 |
| [74] | 十一月(しもつき)十二月のふりこほり、 | 霜月しはすの降水。 |
| [75] | 六月の照りはたゞくにもさはらず來けり。 | 水無月のてりはたゞくにもさはらずきたり。 |
| [76] | この人々、或時は | 此人々ある時は。 |
| [77] | 竹取を呼びいでて、「娘を我にたべ。」と 伏し拜み、手を摩りの給へど、 | 竹取を喚てむすめを我にたべと ふし拜み手をすりのたまへど。 |
| [78] | 「己(おの)がなさぬ子なれば、 | をのがなさぬ子なれば。 |
| [79] | 心にも従はずなんある。」 といひて、月日を過す。 | 心にも隨はずなむある と云て月日を過す。 |
| [80] | かゝればこの人々、家に歸りて | かゝれば此人々家に歸りて。 |
| [81] | 物を思ひ、祈禱(いのり)をし、願をたて、 | 物を思ひ祈りをし願をたつ。 |
| [82] | 思やめんとすれども止むべくもあらず。 | 思ひやむべくもあらず。 |
| [83] | 「さりとも遂に男合せざらんやは。」 と思ひて、頼をかけたたり。 | さりとも終に男あはせざらんやは とおもひて頼をかけたたり。 |
| [84] | 強(あながち)に志を見えありく。 | あながちに心ざしをみえありく。 |
| [85] | これを見つけて、 | 是を見つけて。 |
| [86] | 翁かぐや姫にいふやう、 | 翁かぐや姫に云様。 |
| [87] | 「我子の佛變化の人と申しながら、 | 我子のほとけへんげの人と申ながら。 |
| [88] | こゝら大さまで養ひ奉る 志疎おろかならず。 | こゝらおほきさまでやしなひたてまつる 志をろかならず。 |
| [89] | 翁の申さんこと聞き給ひてんや。」 といへば、 | 翁の申さん事を聞給ひてんや といへば。 |
| [90] | かぐや姫、 | かぐや姫。 |
| [91] | 「何事をか宣はん事を 承らざらん。 | 何事をかのためはむ事を(はい) 承はらざらむ。 |
| [92] | 變化の者にて侍りけん身とも知らず、 | 變化の物にてはんべりけん身ともしらず。 |
| [93] | 翁 | 翁。 |
| [94] | 「嬉しくも宣ふものかな。」といふ。 | うれしくもの給ふ物かなと云。 |
| [95] | 「翁年七十(なゝそぢ)に餘りぬ。 | 翁年七十にあまりぬ。 |
| [96] | 今日とも明日とも知らず。 | 今日ともあすともしらず。 |
| [97] | この世の人は、 | 此世の人は。 |
| [98] | 男は女にあふことをす。 | おとこは女に逢。 |
| [99] | 女は男に合ふことをす。 | 女は男にあふ事をす。 |
| [100] | その後なん門も廣くなり侍る。 | 其後なむ門もひろくもなり侍る。 |
| [101] | いかでかさる事なくては おはしまさん。」 | いかでかさる事なくては おはしまさむ(せんイ)。 |
| [102] | かぐや姫のいはく、 | かぐや姫のいはく。 |
| [103] | 「なでふさることかしはべらん。」 といへば、 | なむでうさる事かし侍らんと 云ば。 |
| [104] | 「變化の人といふとも、 | 變化の人といふとも。 |
| [105] | 女の身もち給へり。 | 女の身持給へり。 |
| [106] | 翁のあらん限は、 | 翁のあらんかぎりは。 |
| [107] | かうてもいますかりなんかし。 | かうてもいますかりなんかし。 |
| [108] | この人々の年月を経て、 | 此人々の年月を経て。 |
| [109] | かうのみいましつゝ、 宣ふことを思ひ定めて、 | かうのみいましつゝ のため事をおもひ定て。 |
| [110] | 一人々々にあひ奉り給ひね。」といへば、 | 獨々にあひ奉り給ひねといへば。 |

- [111] かぐや姫いはく、
 [112] 「よくもあらぬ容を、
 [113] 深き心も知らで、
 『あだ心つきなば、
 後悔しきこともあるべきを。』
 と思ふばかりなり。
 [114] 世のかしこき人なりとも、
 [115] 深き志を知らでは、あひ難し
 となん思ふ。」といふ。
- [116] 翁いはく、
 [117] 「思の如くものたまふかな。
 [118] そも\／いかやうなる
 志あらん人にかあはんと思す。
 [119] かばかり志疎ならぬ人々
 にこそあめれ。」
- [120] かぐや姫のいはく、
 [121] 「何ばかりの深きをか見んといはん。
 [122] いさゝかのことなり。
 [123] 人の志ひとしかんなり。
 [124] いかでか中に劣勝(おとりまさり)は知らん。
 [125] 「五人の中にゆかしき物見せ給へらんに、
 「御志勝りたり。」とて仕うまつらん。』と、
 [126] そのおはすらん人々に
 申(まを)し給へ。」といふ。
 [127] 「よきことなり。」とうけつ。
- かぐや姫のいはく。
 よくもあらぬ形を。
 ふかき心もしらで
 あだ心つきなば
 後くやしき事も有べきを
 と思ふばかり也。
 世の賢き人成とも。
 ふかき志をしらではあひがたし
 となん思ふと云。
- 翁いはく。
 思ひのごとくもの給ふかな。
 そもそもいかやうなる
 志あらん人にはあはんとおぼす。
 かばかりの心ざしをろかならぬ人々
 にこそあめれ。
- かぐや姫のいはく。
 なにばかりの深きをかみんといはむ。
 いさゝかの事也。
 人の心ざしひとしかんなり。
 いかでか中にをとりまさりはしらむ。
 五人のひとつの中にゆかしき物みせ給へらんに
 御志まさりたりとてつかふまつらんと。
 そのおはすらん人々に
 申給へといふ。
 よき事なりとうけつ。

3. 無理難題

- [128] 日暮るゝほど、例の集りぬ。
 人々
 [129] 或は笛を吹き、
 [130] 或は歌をうたひ、
 [131] 或は唱歌をし、
 [132] 或はうそを吹き、
 扇をならしなどするに、
 [133] 翁出でていはく、
 [134] 「辱もきたなげなる所に、
 年月を経て物し給ふこと、
 [135] 極まりたるかしこまりを申す。
 [136] 『翁の命今日明日とも知らぬを、
 [137] かくのたまふ君達(きみたち)にも、
 よく思ひ定めて仕うまつれ。』と申せば、
 [138] 『深き御心をしらでは』となん申す。
 さ申すも理なり。
- 日くるゝ程に例のあつまりぬ。
 あるひは笛を吹。
 或はうたをうたひ。
 或は琵琶しやうか(唱歌)をし。
 あるひはうそ・(をイ)ふき
 あふぎをならしなどするに。
 翁出ていはく。
 忝もきたなげなる所に
 年月を経てものし給ふ事。
 きはまりたるかしこまりと申す。
 翁の命今日明日ともしらぬを。
 かくの給ふ君達にも。
 よく思ひ定てつかふまつれと
 申も理なり。
- [139] 『いづれ劣勝おはしまさねば、
 [140] ゆかしきもの見せ給へらんに、
 御(おん)志のほどは見ゆべし。
 [141] 仕うまつらんことは、
 [142] それになむ定むべき。』といふ。
 [143] これ善きことなり。
 [144] 人の恨もあるまじ。」といへば、
 [145] 五人の人々も「よきことなり。」といへば、
 [146] 翁入りていふ。
- いづれもをとり増りおはしまさねば。
 御志の程はみゆべし。
 つかふまつらん事は。
 それになむ定むべきといへば。
 是よき事なり。
 人の御恨も有まじと云。
 五人の人々もよき事也といへば。
 翁入て云。

- | | | |
|-------|-------------------------------------|---------------------------------------|
| [147] | かぐや姫、 | かぐや姫。 |
| [148] | 石作皇子には、 | 石作の御子には |
| [149] | 「天竺に佛の御(み)石の鉢といふものあり。それをとりて給へ。」といふ。 | ・(天竺にイ)佛の御いしのはちと云物あり。それをとりて給へと云。 |
| [150] | 車持皇子には、 | 倉もちの御子には。 |
| [151] | 「東(ひんがし)の海に蓬萊といふ山あなり。 | 東の海に蓬萊と云山あり。 |
| [152] | それに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實としてたてる木あり。 | それにしろがねを根として金をくきとし白き玉をみとし・(てイ)たてる木あり。 |
| [153] | それ一枝折りて給はらん。」といふ。 | それを一えだおりて給はらんと云。 |
| [154] | 今一人には、 | 今獨には。 |
| [155] | 「唐土にある、火鼠の裘(かほごろも)を給へ。」 | もろこしにある火鼠の革ぎぬをたまへ。 |
| [156] | 大伴大納言には、 | 大とも(伴イ)の大納言には。 |
| [157] | 「龍(たつ)の首に五色に光る玉あり。 | 龍のくびに五色に光る玉あり。 |
| [158] | それをとりて給へ。」 | それをとりて給へ。 |
| [159] | 石上中納言には、 | 磯の上の中納言には。 |
| [160] | 「燕(つばくらめ)のもたる子安貝一つとりて給へ。」といふ。 | つばくらめのもたるこやすのかひ一つ(イ无)とりて給へといふ。 |
| [161] | 翁 | 翁。 |
| [162] | 「難きことどもにこそあなれ。 | かたき事どもにこそあなれ。 |
| [163] | この國にある物にもあらず。 | 此國に有物にはあらず。 |
| [164] | かく難き事をばいかに申さん。」といふ。 | かく難事をばいかに申さんといふ。 |
| [165] | かぐや姫、 | かぐや姫。 |
| [166] | 「何か難からん。」といへば、 | なにかかたからんといへば。 |
| [167] | 翁、 | 翁。 |
| [168] | 「とまれかくまれ申さん。」とて、出でて | とまれかくまれ申さんとて出て。 |
| [169] | 「かくなん、聞ゆるやうに見せ給へ。」といへば、 | かくなむきこゆるやうに見たまへといへば。 |
| [170] | 皇子達上達部聞きて、 | 御子たち上だちめ聞て。 |
| [171] | 「おいらかに、『あたりよりだになありきそ。』とやは宣はぬ。」 | おいらかにあたりよりだになありきそとやはのたまはぬといひて。 |
| [172] | といひて、うんじて皆歸りぬ。 | うむじてみな歸ぬ。 |

4. 石作皇子

- | | | |
|-------|------------------------------|--------------------------------|
| [173] | 「猶この女見では、 | なを此女みでは。 |
| [174] | 世にあるまじき心ちのしければ、 | 世にあるまじき心ちしければ。 |
| [175] | 天竺にあるものも持てこぬものかは。」と、思ひめぐらして、 | 天竺にある物も持てこぬものかはと思ひめぐらして。 |
| [176] | 石作皇子は心のしたくみある人にて、 | いしづくりの御子は心のしたくある人にて。 |
| [177] | 「天竺に二つとなき鉢を、 | 天竺に二つとなきはちを。 |
| [178] | 百千萬里の程行きたりともいかでか取るべき。」と思ひて、 | 百千萬里のほどいきたりともいかで・(かイ)とるべきと思ひて。 |
| [179] | かぐや姫の許には、 | かぐや姫のもとには。 |
| [180] | 「今日なん天竺へ石の鉢とりにまかる。」と聞かせて、 | 今日なん天竺へ石のはちとにまかると聞せて。 |

- | | | |
|----------|--|--|
| [181] | 三年ばかり経て、大和國 十市郡(とをちのこほり)にある山寺に、 | 三年計大和國 とをちの郡に有山寺に。 |
| [182] | 竇頭盧(びんづる)の前なる鉢の ひた黒に煤つきたるをとりて、 | びむづるの前なるはちの ひたぐろに墨付たるを取て。 |
| [183] | 錦の袋に入れて、 | 錦の袋に入て。 |
| [184] | 作花の枝につけて、 | つくり花の枝につけて。 |
| [185] | かぐや姫の家にもて来て見せければ、 | かぐや姫の家にもて来て見せければ。 |
| [186] | かぐや姫あやしがりて見るに、 | かぐや姫あやしがりてみれば。 |
| [187] | 鉢の中に文あり。 | はちの中にふみ有。 |
| [188] | ひろげて見れば、 | ひろげて見れば。 |
| ♪1 [189] | 海山の みちにこゝろをつくしはて みいしの鉢の なみだながれき | 海山の 道にこゝろをつくしはて な[みイ]いしの鉢の なみた流れき |
| [190] | かぐや姫、「光やある。」と見るに、 | かぐや姫光や有とみるに。 |
| [191] | 螢ばかりのひかりだになし。 | 螢ばかりのひかりだになし。 |
| ♪2 [192] | おく露の ひかりをだにもやどさまし 小倉山にて なにもとめけむ | 置露の 光をだにもやとさまし をくら山にて なにもとめけむ |
| [193] | とてかへしいだすを、 | とて返し出すを。 |
| [194] | 鉢を門に棄てゝ、 | はちを門にすてゝ。 |
| [195] | この歌のかへしをす。 | 此歌の返しをす。 |
| ♪3 [196] | しら山に あへば光のうするかと はちを棄てゝも たのまるゝかな | しら山に あへは光のうするかと 鉢をすてゝも 頼まるゝかな |
| [197] | とよみて入れたり。 | とよみて入たり。 |
| [198] | かぐや姫返しもせずなりぬ。 | かぐや姫返しもせずなりぬ。 |
| [199] | 耳にも聞き入れざりければ、 | みゝにも聞入ざりければ。 |
| [200] | いひ煩ひて歸りぬ。 | いひわづらひて歸りぬ。 |
| [201] | かれ鉢を棄てゝ またいひけるよりぞ、 | かのはちをすてゝ 又云けるによりぞ。 |
| [202] | 面なき事をば はちをすつとはいひける。 | おもなき事をば はちをすつとはいひける。 |

5. 車持皇子

- | | | |
|-------|-----------------------------------|-------------------------------|
| [203] | 車持皇子は | 倉もちの御子は。 |
| [204] | 心たばかりある人にて、 | 心たばかりある人にて。 |
| [205] | 公には、 | おほやけには。 |
| [206] | 「筑紫の國に湯あみに罷らん。」 とて、暇申して、 | つくしの國にゆあみにまからん とていとま申して。 |
| [207] | かぐや姫の家には、 | かぐや姫の家には。 |
| [208] | 「玉の枝とりになんまかる。」 といはせて下り給ふに、 | 玉のえだとりになむまかる といはせてくだり給ふに。 |
| [209] | 仕うまつるべき人々、 皆難波まで御おくりしけり。 | つかふまつるべき人々 皆難波まで御送りしける。 |
| [210] | 皇子「いと忍びて。」と宣はせて、 人も數多率ておはしませず、 | 御子いと忍びてのたまはせて 人もあまたおはしませず。 |
| [211] | 近う仕うまつる限して出で給ひぬ。 | ちかうつかうまつる限りしていで給ひ。 |

- [212] 御おくりの人々、
見奉り送りて歸りぬ。 御送りの人々
見たてまつり送りて歸りぬ。
- [213] 「おはしましぬ。」
と人には見え給ひて、 おはしましぬ
と人にみえ給ひて
三日許ありて漕ぎ歸り給ひぬ。 三日ばかりありて漕かへり給ひぬ。
- [214] かねて事皆仰せたりければ、
その時一の工匠(たくみ)なりける かねてことみなおほせたりければ
内匠(うちたくみ) 其時ひとつ(一のイ)賣なりける
六人を召しとりて、 かぢ[内イ]たくみ
六人をめしとりて。
- [215] 容易(たはやす)く人より たくみはやすく人より
くまじき家を作りて、 くまじき家つくり[家をつくりてイ]。
- [216] 構を三重にしこめて、 かまどをみへにしこめて。
- [217] 工匠等を入れ給ひつゝ、 たくみらを入給ひつゝ
皇子も同じ所に籠り給ひて、 御子も同じ所にこもり給ひて。
- [218] しらせ給ひつるかぎり しろせ給ひたるかぎり。
- [219] 十六そをかみにくどをあけて、 十六そをかみにくどをあけて
玉の枝をつくり給ふ。 玉のえだを作り給ふ。
- [220] かぐや姫のたまふやうに、 かがや姫のたまふやうに
違はずつくり出でつ。 たがはず作り出づ。
- [221] いかしこくたばかりて、 いかしこくたばかりて。
- [222] 難波に密(みそか)にもて出でぬ。 難波にみそかにもて出ぬ。
- [223] 「船に乗りて歸り來にけり。」と、 船に乗てかへり來にけりと
殿に告げやりて、 とのにつげやりて
いといたく苦しげなるさまして居給へり。 いといたく苦しがりたるさましてゐたまへり。
- [224] 迎に人多く参りたり。 むかへに人多く参りたり。
- [225] 玉の枝をば長櫃に入れて、 玉のえだをばながびつに入て
物覆ひてもちて参る。 物おほひて持てまいる。
- [226] いつか聞きけん、 いつか聞けむ。
- [227] 「車持皇子は、 くらもちの御子は。
- [228] 優曇華の花もちて うどんぐゑの花もちて
上り給へり。」とのゝしりけり。 のぼりたまへりとのゝしりけり。
- [229] これをかぐや姫聞きて、 是をかぐや姫聞て
「我はこの皇子にまけぬべし。」 我は此御子にまけぬべし
と、胸つぶれて思ひけり。 と胸つぶれて思ひけり。
- [230] かゝるほどに門(もん)を叩きて、 かゝるほどに門をたゝきて。
- [231] 「車持皇子おはしたり。」と告ぐ。 倉持の御子おはしたりとつぐ。
- [232] 「旅の御姿ながら 旅の御姿ながら
おはしましたり。」といへば、 おはしましたりといへば。
- [233] 逢ひ奉る。 あひたてまつる。
- [234] 皇子のたまはく、 御子のたまはく。
- [235] 「『命を捨てゝ 命をすてゝ
かの玉の枝持てきたり。』とて、 かの玉のえだもちて來りとて。
- [236] かぐや姫に見せ奉り給へ。」といへば、 かがや姫に見せ奉り給へといへば。
- [237] 翁もちて入りたり。 翁持て入りたり。
- [238] この玉の枝に文をぞつかけたりける。 此玉のえだにふみぞつかけたりける。
- ♪4 [239] いたづらに 徒に
身はなしつとも玉の枝を 身はなしつとも玉のえだ(をイ)
手をらでさらに たをらて更に
歸らざらまし かへらざらまし
- [240] これをもあはれと見て居をるに、 是をも哀とも見てをるに
竹取の翁走り入りていはく、 竹とりの翁走入りていはく。

- [241] 「この皇子に申し給ひし
蓬萊の玉の枝を、
- [242] 一つの所もあやしき處なく、
- [243] あやまたずもおはしませり。
- [244] 何をもちてか、
とかく申すべきにあらず。
- [245] 旅の御姿ながら、
- [246] 我御家へも
寄り給はずしておはしましたり。
- [247] はやこの皇子に
あひ仕うまつり給へ。」といふに、
- [248] 物もいはず頼杖(つらづゑ)をつきて、
- [249] いみじく歎かしげに思ひたり。
- [250] この皇子
「今さら何かといふべからず。」
といふまゝに、
- [251] 縁にはひのぼり給ひぬ。
- [252] 翁ことわりに思ふ。
- [253] 「この國に見えぬ玉の枝なり。
- [254] この度はいかでかいなびまをさん。
- [255] 人さまよき人におはす。」
などいひ居たり。
- [256] かぐや姫のいふやう、
- [257] 「親ののたまふことを、
ひたぶるに
いなび申さんことのいとほしさに、
- [258] 得難きものを、
かくあさましくもてくること」を
ねたく思ひ、
- [259]
- [260] 翁は閨の内しつらひなどず。
- [261] 翁皇子に申すやう、
- [262] 「いかなる所にかこの木はさぶらひけん。
- [263] 怪しく麗しくめでたきものにも。」と申す。
- [264] 皇子答こたへての給はく、
「前一昨年(さをとゝし)の
二月(きさらぎ)の十日頃に、
難波より船に乗りて、海中にいでて、
- [266] 行かん方も知らず覺えしかど、
『思ふこと成らでは、
世の中に生きて何かせん。』
と思ひしかば、
- [268] たゞ空しき風に任せてありく。
- [269] 『命死なばいかゞはせん。
- [270] 生きてあらん限はかくありきて、
蓬萊といふらん山に逢ふや。』と、
- [271] 浪にたゞよひ漕ぎありきて、
- [272] 我國の内を離れてありき廻りしに、
或時は浪荒れつゝ海の底にも入りぬべく、
- [273] 或時は風につけて
知らぬ國にふき寄せられて、
- [274] 鬼のやうなるものいで来て殺さんとしき。
- [275] 或時には來し方行末も知らず、
海にまぎれんとしき。
- [276] 或時にはかて盡きて、
草の根を食物としき。
或時はいはん方なく
むくつけなるもの来て、
- [277] 食ひかゝらんとしき。
- 此御子に申し給ひし
蓬萊の玉のえだを。
ひとつの所あやしき所なく。
あやまたずもおはしませり。
何をもちて・[かい]
とかく申すべきにあらず。
旅御姿ながら。
我家へも
よりたまはずしておはしましたり。
はや此御子に
あひつかうまつり給へといふに。
物もいはでつらづえ・(をイ)付て。
いみじくなげかしげに思ひたり。
- 御子
今何かと云べからず
と云まゝに。
縁にはひのぼり給ぬ。
翁理と思ひ。
此國にみえぬ玉の枝也。
此度はいかでかいなび申さん。
人様もよき人におはす
など云ゐたり。
- かぐや姫の云やうは(イ无)。
親のたまふ事を
ひたぶるに
いなび申さん事のいとをしさに。
取がたき物を
かくあさましくもてきたる事を
ねたくおもひ
・[侍るといへど。なほイ]。
翁は閨の内しつらひなどず。
- 翁御子に申すやう。
いかなる所にか此木は候けん。
あやしくうるはしくめでたきものにもと申。
御子こたへての給く。
さをとゝしの
きさらぎの十日頃に
難波より船に乗て海の中に出て。
ゆかんかたもしらず覺しかど。
思ふ事ならで
世中に生きて何かせん
と思ひしかば。
たゞむなしき風にまかせてありく。
命しなばいかゞはせん。
いきてあらん限かくありきて。
蓬萊といふらん山にあふやと
海に漕たゞよひありきて。
我國のうちを離てありき廻まかイリしに。
ある時はなみ荒つゝ海の底に入ぬべく
或時は風につけて
しらぬ國に吹よせられて。
鬼のやうなるもの出来て殺さんとす。
ある時はこしかた行末もしらず
海にまぎれむとしき。
或時にはかてつきて
草の根をくひものとす。
ある時はいはんかたなく
むくつけ[つけげイ]なるものきて
くひかゝらんとしき。

- [278] 或時には海の貝をとりて、命をつぐ。
 [279] 旅の空に助けべき人もなき所に、
 いろ／＼の病をして、
 [280] 行方すらも覺えず、
 船の行くに任せて、
 [281] 海に漂ひて、
 五百日(いほか)といふ辰の時許に、
 [282] 海の中に遙に山見ゆ。
 [283] 舟のうちをなんせめて見る。
 [284] 海の上に漂へる山
 いと大きにてあり。
 [285] 其山の様高くうはし。
 [286] 『是や我覓むる山ならん。』
 と思へど、
 [287] さすがに畏(おそろ)しく覺えて、
 山の圍(めぐり)を指し廻らして、
 二三日(ふつかみか)許見ありくに、
 [288] 天人(あまびと)の粧したる女、
 山の中より出て来て、
 銀の金鉢をもて
 水を汲みありく。
 [289] これを見て船よりおりて、
 [290] 『この山の名を何とか申す。』と問ふに、
 [291] 女答へて曰く、
 [292] 『これは蓬萊の山なり。』と答ふ。
 [293] 是を聞くに嬉しき事限なし。
 [294] この女に、『かく宣ふは誰ぞ。』と問ふ。
 [295] 『我名はほうかんるり。』といひて、
 [296] ふと山の中に入りぬ。
 [297] その山を見るに、
 更に登るべきやうなし。
 [298] その山のそばつらを廻れば、
 [299] 世の中になき花の木どもたてり。
 [300] 金銀瑠璃色の水
 流れいでたり。
 [301] それにはいろ／＼の玉の橋わたせり。
 [302] そのあたり照り輝く木どもたてり。
 [303] その中に
 このとりて持てまうできたりしは、
 [304] いとわろかりしかども、
 [305] 『のたまひしに違はましかば。』とて、
 [306] この花を折りてまうできたるなり。
 [307] 山は限なくおもしろし。
 [308] 世に譬ふべきにあらざりしかど、
 [309] この枝を折りてしかば、
 [310] さらに心もとなくて、
 [311] 船に乗りて追風ふきて、
 [312] 四百餘日になんまうで來にし。
 [313] 大願(だいぐわん)の力にや、
 [314] 難波より
 昨日なん都にまうで來つる。
 [315] さらに潮にぬれたる衣(ころも)を
 だに脱かへなでなん、まうで來つる。」
 との給へば、
 [316] 翁聞きて、うち歎きてよめる、
 吳竹の
 よゝのたけとり野山にも
 さやはわびしき
 ふしをのみ見し
- ある時は海の貝をとりて命をつぐ。
 旅の空にたすけ給ふべき人もなき所に
 色々のやまひをして。
 行方空も[すらもイ]おぼえず。
 船の行にまかせて
 海にたゞよひて
 五百日といふ辰の時ばかりに。
 海の中に纒に山みゆ。
 舟のうちをなんせめてみる。
 海の上にたゞよへる山
 いとおほきにて有。
 其山のさま高くうはし。
 これや我救る[もとむるイ]山ならん
 と思ひて。
 さすがにおそろしくおぼえて。
 山のめぐりをさしめぐらして
 二三日ばかりみありくに
 天人の粧ひしたる女
 山の中より出て来て
 銀のかなまるをもちて
 水をくみありく。
 是を見て船よりおりて。
 此山の名を何とか申ととふ。
 女こたへていはく。
 是は蓬萊の山なりと答。
 是を聞くに嬉しき事限なし。
 此女かくの給ふは誰そととふ。
 我な・[はイ]ほうかんるりと云て。
 ふと山の中に入ぬ。
 其山を見るに
 更にのぼるべきやうなし。
 其山の岨(しほ)ひらをめぐりければ。
 世中になき花の木どもたてり。
 金銀瑠璃色の水
 山よりながれ出たり。
 それには色々の玉の橋わたせり。
 そのあたりに照輝く木どもたてり。
 其内に
 このとりてもちてまうできたりしは。
 いとわろかりしかども。
 の給ひしにたがはましかばと。
 此花を折てまうで來る也。
 山は限なく面白し。
 世にたとふべきにあらざりしかど。
 此枝を折てしかば。
 更に心もとなくて。
 舟に乗て追手の風吹て。
 四百よ日になん詣きにし。
 大願・[のイ]力にや。
 難波より
 昨日なん都に詣きつる。
 更に鹽に霽たる衣を
 だに脱かへなでなん詣來つる
 とのたまへば。
 翁聞て打歎てよめる。
 吳竹の
 よゝの竹とり野山にも
 さやは侘しき
 ふしをのみ見し

- [318] これを皇子聞きて、
 [319] 「この日の頃
 [320] 思ひわび侍りつる心は、
 [321] 今日なんおちあぬる。」
 [321] との給ひて、かへし、
- 是を御子聞て。
 この日の頃
 思ひ侘侍りつる心・[はい]。
 今日なら[イ无]むおちあぬる。
 との給ひて返し。
- ♪6 [322] わが袂
 けふかわければわびしさの
 ちくさのかずも
 忘れぬべし
- わか袂
 けふかはければ侘しさの
 千種のかずも
 忘れぬへし
- [323] との給ふ。
 [324] かゝるほどに、
 男(をとこ)ども
 六人連ねて庭にいできたり。
 [325] 一人の男、
 [326] 文挾(ふばさみ)に
 文をはさみてます。
- との給ひ。
 かゝる程に
 男・[どもイ]
 六人つらねて庭に出来たり。
 一人・(のイ)おとこ。
 ふばさみに
 文を挿て申。
- [327] 「作物所(つくもどころ)の
 寮(つかさ)のたくみ
 漢部(あやべ)内磨(ま)をさく、
 [328] 『玉の木を作りて
 仕うまつりしこと、
 [329] 心を碎きて、
 千餘日に
 [330] 力を盡したること少からず。
 [331] しかるに祿(ろく)いまだ賜(たま)はらず。
 [332] これを賜(たま)はり分ちて、
 けごに賜(たま)はせん。』
 といひてさゝげたり。
- つくもどころ
 つかさのたくみ
 あやべのうちまろ申さく。
 玉の木を作り
 つかふまつりし事。
 五穀(ごこく)を断(と)て。
 千餘日に
 力をつくしたる事すくなからず。
 然るに録(ろく)[ま]いまだ給(たま)はらず。
 是給(たま)はりてわろき
 けごにたまはせん
 と云てさゝげたり。
- [333] 竹取の翁、
 「この工匠(こうげい)等(ら)が申(ま)すことは
 [334] 何事(なにじ)ぞ。」とかたぶきをり。
 [335] 皇子(みこ)は我(われ)にもあらぬけしきにて、
 [336] 肝(かん)消(しょう)ぬべき心(こころ)ちして居(ゐ)給(たま)へり。
- 竹(たけ)とり
 此(こ)工(こう)等(ら)が申(ま)事を[はい]。
 何事(なにじ)ぞとかたぶきおり。
 御子(みこ)は我(われ)にもあらぬけしきにて。
 肝(かん)消(しょう)ぬべき心(こころ)ちしてゐ給(たま)へり。
- [337] これをかぐや姫(ひめ)聞(き)きて、
 [338] 「この奉(ほう)る文(ぶん)をとれ。」
 [339] といひて見(み)れば、
 文(ぶん)に申(ま)しけるやう、
- 是(これ)をかぐや姫(ひめ)聞(き)て。
 此(こ)奉(ほう)る文(ぶん)をとれ
 と云(い)てみれば。
 ふみに申(ま)しけるやう。
- [340] 「皇子(みこ)の君(きみ)
 [341] 千餘(ちよ)日(ひ)賤(せん)しき工匠(こうげい)等(ら)と諸(しよ)共(ども)に、
 同(どう)じ所(ところ)に隠(かく)れ居(ゐ)給(たま)ひて、
 [342] かしこき玉(たま)の枝(えだ)をつくらせ給(たま)ひて、
 [343] 『官(つかさ)も賜(たま)はらん。』
 と仰(おほ)せ給(たま)ひき。
 [344] これをこの頃(ころ)案(あん)ずるに、
 [345] 『御(ご)つかひとおはしますべき、
 かぐや姫(ひめ)の要(い)給(たま)ふべき
 なりけり。』と承(う)りて、
 [346] この宮(みや)より賜(たま)はらんと申(ま)して
 [347] 給(たま)はるべきなり。」
 といふを聞(き)きて、
- 御子(ご)のきみ。
 千日(ちよ)いやしき匠(じやう)等(ら)ともろともに
 同(どう)じ所(ところ)に隠(かく)れたまひて。
 かしこき玉(たま)の枝(えだ)をつくらせ給(たま)ひて。
 司(つかさ)もたまは・(らい)ん
 と仰(おほ)給(たま)ひき。
 是(これ)を・[このイ]頃(ころ)あんずるに。
 御(ご)つかひとおはしますべき
 かぐや姫(ひめ)のえうし給(たま)ふべき
 成(なり)けりと承(う)て。
 此(こ)宮(みや)よりたまはらんと申(ま)て。
 給(たま)るべきなり
 と云(い)を聞(き)て。
- [348] かぐや姫(ひめ)、
 暮(く)るまゝに
 思(おも)ひわびつる心(こころ)地(ぢ)ゑみ榮(え)えて、
 [349] 翁(おきな)を呼(よ)びとりていふやう、
- かぐや姫(ひめ)
 くるまゝに
 忍(しの)び侘(わ)つる心(こころ)ちわらひさかへて。
 翁(おきな)をよびとりて云(い)やう。

| | | |
|----------|---|--|
| [350] | 「誠に蓬萊の木かところ思ひつれ、 | 誠蓬萊の木ところ思ひつれ。 |
| [351] | かくあさましき | かくあさましき |
| [352] | 虚事にてありければ、 | 空事にてありけれ・(はい)。 |
| [352] | はや疾くかへし給へ。」といへば、 | はや返し給へといへば。 |
| [353] | 翁こたふ、 | 翁こたふ。 |
| [354] | 「さだかに造らせたるもの | さすが[だかイ]につくらせたる物 |
| [355] | と聞きつれば、 | と聞きつれば。 |
| [355] | かへさんこといと易し。」 | 返さん事いとやすし |
| | とうなづきをり。 | とうなづきおり。 |
| [356] | かぐや姫の心ゆきはてゝ、 | かぐや姫の心行果て。 |
| [357] | ありつる歌のかへし、 | ありつる歌のかへし。 |
| ♪7 [358] | まことかと 聞きて見つればことの葉を 飾れる玉の 枝にぞありける | まことかと 聞てみつれば言の葉を 飾れる玉の 枝にそ有ける |
| [359] | といひて、玉の枝もかへしつ。 | と云て玉のえだも返しつ。 |
| [360] | 竹取の翁 | 竹取の翁。 |
| [361] | さばかり語らひつるが、 | さばかりかたらひつるが。 |
| [362] | さすがに覺えて眠(ねぶ)りをり。 | さすがに覺てねぶりをり。 |
| [363] | 皇子はたつもはした | 御子は立もはした。 |
| [364] | 居るもはしたにて居給へり。 | ゐるもはしたにてゐ給へり。 |
| [365] | 日の暮ぬればすべ出で給ひぬ。 | 日の暮ぬればすべり出給ひぬ。 |
| [366] | かのうれへせし工匠等をば、 | かのうれへせしたくみをば。 |
| [367] | かぐや姫呼びすゑて、 | かぐや姫よびすへて。 |
| [368] | 「嬉しき子どもなり。」といひて、 | うれしき子どもなりといひて。 |
| [369] | 祿いと多くとらせ給ふ。 | 録[マへ]ども(いとイ)多くとらせ給ふ。 |
| [370] | 工匠等いみじく喜びて、 | たくみらいみじく喜て |
| | 「思ひつるやうにもあるかな。」 | 思ひつるやうにも有哉 |
| | といひて、 | と云て歸る。 |
| [371] | かへる道にて、車持皇子 | 道にてくらもちの御子。 |
| [372] | 血の流るゝまで | ちのながるゝまで |
| | ちようぜさせ給ふ。 | ちやうぜさせ給ふ。 |
| [373] | 祿得しかひもなく | ろくえしかひもなく。 |
| [374] | 皆とり捨てさせ給ひてければ、 | みな取すてさせ給ひてければ。 |
| [375] | 逃げうせにけり。 | 逃うせにけり。 |
| [376] | かくてこの皇子、 | かくて此御子は。 |
| [377] | 「一生の恥 | 一しやうのはぢ |
| | これに過ぐるはあらじ。 | 是にすぐるはあらじ。 |
| [378] | 女をえずなりぬるのみにあらず、 | 女を得ず成ぬるのみにあらず。 |
| | 天の下の人の | 天下の人の |
| [379] | 見思はんことの | 見思はん事の |
| | 恥かしき事。」との給ひて、 | はづかしき事との給ひて。 |
| [380] | たゞ一所深き山へ入り給ひぬ。 | たゞ一所ふかき山へ入給ひぬ。 |
| [381] | 宮司候ふ人々、 | 宮司さぶらひし人々 |
| | 皆手を分ちて | みなてを分ちて |
| | 求め奉れども、 | もとめたてまつれども。 |
| [382] | 御躰(みまかり)もやし | 御しにもやし |
| | たまひけん、 | 給ひけん。 |
| [383] | え見つけ奉らずなりぬ。 | えみつけ奉らず成にけり[ぬイ]。 |
| [384] | 皇子の御供に | [みこの御供に |
| | 隠し給はんとて、 | かくし給はんとて。 |

- [385] 年頃見え給はざりけるなりけり。 年比見え給はざりけるなり。]
- [386] 是をなん 是をなん
たまさかるとはいひ始めける。 たまかざ[さかい]るとはいひはじめける。
6. 阿倍御主人
- [387] 右大臣阿倍御主人は 左大臣安倍のみむらじは。
- [388] 財(たから)豊に 寶ゆたかに
家廣き人にぞおはしける。 家廣き人にぞおはしける。
- [389] その年わたりける唐土船の 其年きたりけるもろこし船の
王卿(わうけい)といふものゝ許に、 わうけいといふ人のもとに
文を書きて、 文を書て。
- [390] 「火鼠の裘といふなるもの 火ねづみの皮といふなる物
買ひておこせよ。」とて、 買ひておこせよとて。
- [391] 仕うまつる人の中に心たしかなるを選びて、 つかふまつる人の中に心たしかなるを撰て。
- [392] 小野房守といふ人をつけてつかはず。 小野房盛と云人をつけてつかはず。
- [393] もていたりて、かの浦に居をる もていたりてかのうらにをる
王卿に金をとらず。 わうけいに金をとらず。
- [394] 王卿文をひろげて見て、返事かく。 わうけい文をひろげて見て返事かく。
- [395] 「火鼠の裘 火鼠の皮衣。
- [396] 我國になきものなり。 此國になき物也。
- [397] おとには聞けども 音にはきけども。
- [398] いまだ見ぬものなり。 いまだ見ずさぶらふ物也。
- [399] 世にあるものならば、 世にある物ならば。
- [400] この國にももてまうで來なまし。 此國にももて詣來なまし。
- [401] いと難きあきなひなり。 いとかたき商也。
- [402] しかれども 然ども
もし天竺にたまさかにもて渡りなば、 若ちやうじやのあたりに
もし長者のあたりに 若ちやうじやのあたりに
とぶらひ求めんに、 とぶらひもとめんに。
- [404] なきものならば、 なき物ならば。
- [405] 使に添へて金返し奉らん。」といへり。 使に添てかねをば返し奉らんといへり。
- [406] かの唐土船來けり。 彼唐ぶねきけり。
- [407] 小野房守まうで來て 小野房盛詣きて。
- [408] まうのぼるといふことを聞きて、 まうのぼると云事を聞て。
- [409] あゆみとうする馬をもちて あゆみとく(うイ)するむまをもちて。
- [410] 走らせ迎へさせ給ふ はしらせむかへさせ給ふ。
- [411] 時に、馬に乗りて、 時に馬に乗て。
- [412] 筑紫よりたゞ七日(なぬか)に 筑紫より唯七日に
上りまうできたり。 のぼりまふで來り。
- [413] 文を見るに 文をみるに。
- [414] いはく、 いはく。
- [415] 「火鼠の裘 火ねずみの革衣。
- [416] 辛うじて、人を出して求めて奉る。 からうじて人を出して取て奉る。
- [417] 今の世にも昔の世にも、 今のよにも昔の世にも。
- [418] この皮は容易(たやす)くなきものなりけり。 此皮はたはやすくなき物也けり。
- [419] 昔かしこき天竺のひじり、 昔賢き天竺の聖。
- [420] この國にもて渡りて侍りける、 此國にもてわたりて侍りける。
- [421] 西の山寺にありと聞き及びて、公に申して、 西の山寺にありと聞及ておほやけに申て。
- [422] 辛うじて買ひとりて奉る。 からうじてかい取て奉る。
- [423] 價の金少しと、 あたひの金すくなしと。
- [424] 國司使に申しかば、 こくし使に申しかば。
- [425] 王卿が物加へて買ひたり。 わうけいが物くはへてかひたり。

- [426] 今金五十兩たまはるべし。 今金五十兩たまはらん。
 [427] 船の歸らんにつけてたび送れ。 舟のかへらんにつけてたび送れ。
 [428] もし金賜はぬものならば、 若金たまはぬ物ならば。
 [429] 裘の質かへしたべ。」 皮衣のしち返したべ。
- [430] といへることを見て、 といへる事をみて。
 [431] 「何おぼす。 なにおぼす。
 [432] 今金少しのことにこそあんなれ。 いま金少の事に[[にてイ]こそあ[ない]めれ。
 [433] 必ず送るべき物にこそあんなれ。 [かならず送るべき物にこそあなれ。]
 [434] 嬉しくしておこせたるかな。」とて、 うれしくしてをこせたる哉とて。
 [435] 唐土の方に向ひて伏し拜み給ふ。 唐のかたにむかひてふし拜み給ふ。
- [436] この裘入れたる箱を見れば、 此革衣入たる箱をみれば。
 [437] 種々のうるはしき瑠璃を 草々のうるはしきるりを
 いろへて作れり。 色へてつくれり。
- [438] 裘を見れば 皮衣を見れば
 紺青(こんじやう)の色なり。 こんじやうの色也。
 [439] 毛の末には 毛のすゑには
 金の光輝きたり。 しがねの光しさゝり(きイ、やきイ)たり。
- [440] げに寶と見え、 寶とみえ
 うるはしきこと比ぶべきものなし。 うるはしき事并ぶべきものなし。
 [441] 火に焼けぬことよりも、 火に焼ぬ事よりも。
 [442] 清(けう)らなることならびなし。 けうらなる事双なし。
- [443] 「むべかぐや姫の うべかぐや姫
 このもしがり給ふにこそありけれ。」 このもしがり給ふにこそありけれ
 との給ひて、 との給ひて。
 [444] 「あなかしこ。」とて、 あなかしこことて。
 [445] 箱に入れ給ひて、 箱に入たまひて
 物の枝につけて、 ものの枝に付て。
 [446] 御身の假粧(けさう)いといたくして、 御身のけさう(化粧)いといたくして。
 [447] やがてとまりなんものぞとおぼして、 やがてとまりなむ物ぞとおぼして。
 [448] 歌よみ加へて持ちていましたり。 歌讀くはへてもちていましたり。
 [449] その歌は、 其歌は。
- ♪8 [450] かぎりなき 思ひにやけぬかは衣
 おもひに焼けぬかはごろも 袂かはきて
 袂かわきて 今日こそはきめ 今こそはきめ
- [451] と云り。
 [452] 家の門かだにもて至りて立てり。 家の門にもていたりてたてり。
- [453] 竹取いで来て 竹取出きて。
 [454] とり入れて、かぐや姫に見す。 取入てかぐや姫に見す。
 [455] かぐや姫 かがや姫の。
 [456] かの裘を見ていはく、 皮衣をみて云く。
 [457] 「うるはしき皮なめり。 うるはしき皮・[きぬイ]なめり。
 [458] わきてまことの皮ならんとも知らず。」 わきて誠の皮ならんとも知らず。
- [459] 竹取答へていはく、 竹とりこたへていはく。
 [460] 「とまれかくまれ とまれかくまれ。
 [461] まづ請じ入れ奉らん。 先しやうじ入奉らん。
 [462] 世の中に見えぬ裘のさまなれば、 世中にみえぬ皮衣のさまなれば。
 [463] 是をまことと思ひ給ひね。 これを・[まこと]と思ひ給ね。
 [464] 人ないたくわびさせ給ひそ。」といひて、 人ないたく詫させ・[奉らせ]たまひそと云て。
 [465] 呼びすゑたてまつれり。 よびすへ泰れり。

- [466] かく呼びすゑて、
[467] 「この度は必ずあはん。」と、
姫の心にも思ひをり。
- [468] この翁は、
[469] かぐや姫のやもめなるを歎かしければ、
[470] 「よき人にはあはせん。」と思ひはかれども、
[471] 切に「否。」といふことなれば、
えしひぬはことわりなり。
- [472] かぐや姫翁にいはいく、
[473] 「この裘は火に焼かんに、
[474] 焼けずはこそ實ならめと思ひて、
[475] 人のいふことにもまけめ。
[476] 『世になきものなれば、
[477] それを實と疑なく思はん。』
との給ひて、
[478] なほこれを焼きて見ん。」といふ。
- [479] 翁「それさもいはれたり。」といひて、
[480] 大臣(おとど)に「かくなん申す。」といふ。
[481] 大臣答へてはいはいく、
[482] 「この皮は唐土にもなかりけるを、
[483] 辛うじて求め尋ね得たるなり。
[484] 何なにの疑かあらん。
[485] さは申すとも、
[486] はや焼きて見給へ。」といへば、
- [487] 火の中にうちくべて焼かせ給ふに、
[488] めら／＼と焼けぬ。
[489] 「さればこそ異物の皮なりけり。」といふ。
[490] 大臣これを見給ひて、
[491] 御顔は草の葉の色して居給へり。
- [492] かぐや姫は
「あなうれし。」と喜びて居たり。
[493] かのよみ給へる歌のかへし、
[494] 箱に入れてかへす。
- ♪9 [495] なごりなく
もゆと知りせばかは衣
おもひの外に
おきて見ましを
- [496] とぞありける。
[497] されば歸りいましにけり。
- [498] 世の人々、
[499] 「安倍大臣は
火鼠の裘をもていまして、
[500] かぐや姫にすみ給ふとな。
[501] こゝにやいます。」など問ふ。
[502] 或人のいはいく、
[503] 「裘は火にくべて焼きたりしかば、
[504] めら／＼と焼けにしかば、
[505] かぐや姫逢給はず。」といひければ、
[506] これを聞きてぞ、
とげなきものをば
[507] あへなしとはいひける。
- かくよびすへて。
此たび必あはんと
女の心にも思ひをり。
- 翁は
かぐや姫のやもめなるをなげかしければ。
よき人にはあはせむと思ひはかれど。
せちにいなといふ事なれば。
えしひぬはことわりなり。
- かぐや姫翁にいはいく。
此皮ぎぬは火にやかんに。
焼ずばこそまことならめと思ひて。
人の云事にもまけめ。
世になき物なれば。
それをまこととうたがひなく思はん
との給ひて。
猶是をやきてころみむといふ。
- おきなそれさもいはれたりといひて。
大臣にかくなん申と云。
大臣こたへてはいはいく。
此革は唐にもなかりし[けるイ]と[をイ]。
からうじて取尋[求イ]えたる也。
何の疑あらん。
左は申すとも。
はや焼て見給へといへば。
- 火のうちに打くべてやかせ給ふに。
めら／＼とやけぬ。
さればこそことの皮也けりといふ。
大臣是を見給ひて。
・[御イ]かほは草の葉の色してあたまへり。
- かぐや姫は
あなうれしとよろこびていたり。
かのよみ給ひけるうたの返し。
箱に入れてかへす。
- 餘波なく
もゆとしりせばは皮衣
おもひのほか
置て見ましを
- とぞ有ける。
されば歸りいましにけり。
- よの人々。
あべの大臣
火鼠の皮ぎぬもていまして。
かぐや姫にすみ給ふとな。
こゝにやいますなどとふ。
ある人のいはいく。
皮は火にくべてやきたりしかば。
めら／＼とやけにしかば。
かぐや姫逢給はずと云ければ。
是を聞てぞ。
とげなき物をば
あへなしと・(はイ)云ける。

7. 大伴御行

- | | | |
|-------|--|---|
| [508] | 大伴御行の大納言は、 | 大友(伴イ)の御ゆきの大納言は。 |
| [509] | 我家にありとある人を召し集めての給はく、 | 我家に有とある人めしあつめての給はく。 |
| [510] | 「龍(たつ)の首に 五色の光ある玉あなり。」 | 龍の首に 五色の光ある玉あなり。 |
| [511] | それをとり奉りたらん人には、 | それとりてたてまつりたらん人には。 |
| [512] | 願はんことをかなへん。」 との給ふ。 | ねがはん事をかなへん とのたまふ。 |
| [513] | 男(をのこ)ども 仰の事を承りて申さく、 | 男ども 仰の事を承て申さく。 |
| [514] | 「仰のことはいと尊(たふと)し。 | 仰の事はいとたうとし。 |
| [515] | たゞしこの玉容易(たはやす)くえとらじを、 | 但此玉たはやすくえとらじを。 |
| [516] | 況や龍の首の玉は いかゞとらん。」と申しあへり。 | いはんや龍の首の玉は いかゞとらむと申しあへり。 |
| [517] | 大納言のたまふ、 | 大納言のたまふ。 |
| [518] | 「君の使といはんものは、 | てん[きみイ]の使といはんものは。 |
| [519] | 『命を捨てゝも 己(おの)が君の仰事をば かなへん。』 | 命をすてゝも をのが君の仰ごとをば。 かなへん |
| [520] | とこそ思ふべけれ。 | とこそおもは[ふイ]べけれ。 |
| [521] | この國になき 天竺唐土の物にもあらず、 | 此國になき 天竺唐の物にもあらず。 |
| [522] | この國の海山より 龍はおりのぼるものなり。 | 此國の海山より 龍はおりのぼるもの也。 |
| [523] | いかに思ひてか | いかに思ひてか。 |
| [524] | 汝等難きものと申すべき。」 | なんぢらかたき物と申べき。 |
| [525] | 男ども申すやう、 | をのこども申すやう。 |
| [526] | 「さらばいかゞはせん。 | さらばいかゞはせむ。 |
| [527] | 難きものなりとも、 | かたき事(ものイ)成とも。 |
| [528] | 仰事に従ひてもとめにまからん。」と申す。 | 仰ごとに随てもとめにまからむと申に。 |
| [529] | 大納言見笑ひて、 | 大納言見わらひて。 |
| [530] | 「汝等君の使と名を流しつ。 | なんぢらが君の使と名をながしつ。 |
| [531] | 君の仰事をばいかゞは背くべき。」 との給ひて、 | 君のおほせごとをば如何は背くべき との給ひて。 |
| [532] | 龍の首の玉とりにとて出したて給ふ。 | 龍の首の玉取にとて出し立給ふ。 |
| [533] | この人々の | 此人々の。 |
| [534] | 道の糧・食物に、 | みちのかてくひ物に。 |
| [535] | 殿のうちの絹 | とのうちのきぬ。 |
| [536] | ・綿 | わた。 |
| [537] | ・錢など | ぜに(錢)など。 |
| [538] | あるかぎりとり出でそへて遣はず。 | ある限取出てそへてつかはず。 |
| [539] | この人々ども、歸るまでいもひをして 「我は居らん。 | 此人どもの歸るまでいもひをして 我はをらん。 |
| [540] | この玉とり得では家に歸りくな。」 との給はせけり。 | 此玉取えでは家にかへりくな とのたまはせけり。 |
| [541] | 「おの\／仰承りて罷りいでぬ。 | 各仰承て罷ぬ。 |
| [542] | 龍の首の玉とり得ずは歸りくな。」 との給へば、 | たつのかしらの玉とりえずばかへりくな とのたまへば。 |
| [543] | いづちも\／ | いづちも/ \ |
| [544] | 足のむきたらんかたへいなんとす。 かゝるすき事をし給ふことゝそしりあへり。 | 足のむきたらんかたへゆか(いなイ)んとす。 かゝるすき事をし給ふ事と誹りあへり。 |

- [545] 賜はせたる物は
おのゝ分けつゝとり、
[546] 或あるは己が家にこもりぬ、
[547] 或はおのがゆかまほしき所へいぬ。
[548] 「親・君と申すとも、
かくつきなきことを仰せ給ふこと。」と、
[549] ことゆかぬものゆゑ、
[550] 大納言を誇りあひたり。
- たまはら[イ无]せたる物
各分つゝとる。
或はをのが家に籠り居。
或はをのがゆかまほしき所へいぬ。
親君と申すとも
かくつきなき事をの(仰イ)給ふ事と。
ことゆかぬ・[ものイ]ゆへ。
大納言をそしりあひたり。
- [551] 「かぐや姫すゑんには、
[552] 例のやうには見にくし。」との給ひて、
[553] 麗しき屋をつくり給ひて、
[554] 漆を塗り、
[555] 蒔繪をし、いろへしたまひて、
[556] 屋の上には糸を染めて
いろゝに葺かせて、
[557] 内々のしつらひには、
[558] いふべくもあらぬ綾織物に繪を書きて、
間ごとにはりたり。
- かぐや姫すへんには。
れいやうには見にくしとの給ひて。
うるはしき屋を作り給ひて。
うるしをぬり。
蒔繪し給ひて。
屋のうへにはいとをそめて
いろゝふかせて。
内々のしつらひには。
いふべくもあらぬ綾織物に繪を書て
まごと(間毎)にはりたり。
- [559] もとの妻どもは去りて、
[560] 「かぐや姫を必ずあはん。」とまうけて、
[561] 獨明し暮したまふ。
- もとのめどもは。
かぐや姫を必あはんまふけて。
獨明しくらし給ふ。
- [562] 遣しゝ人は夜晝待ち給ふに、
[563] 年越ゆるまで音もせず、
[564] 心もとながりて、
[565] いと忍びて、
[566] たゞ舍人二人召繼として
[567] やつれ給ひて、
[568] 難波の邊(ほとり)におはしまして、
問ひ給ふことは、
[569] 「大伴大納言の人や、
[570] 船に乗りて龍殺して、
[571] そが首の玉とれるとや聞く。」
[572] と問はするに、
- つかひし人は夜晝待給ふに。
年越るまで音もせず。
心もとなく(かりイ)て。
いと忍て。
ただ舍人二人召付として。
やつれ給ひ・[てイ]。
難波の邊におはしまして
問給ふ事は。
大友(伴イ)の大納言どのの人や。
ふねに乗て龍ころして。
其首の玉とれるとや聞と。
とはするに。
- [573] 船人答へていはく、
[574] 「怪しきことかな。」と笑ひて、
[575] 「さるわざする船もなし。」と答ふるに、
- 舟人こたへていはく。
あやしき事哉とわらひて。
さるわざするふねもなしと答るに。
- [576] 「をぢなきことする船人にもあるかな。
[577] え知らでかくいふ。」とおぼして、
[578] 「我弓の力は、
[579] 龍あらば
ふと射殺して首の玉はとりてん。
[580] 遅く来るやつばらを待たじ。」との給ひて、
- おぢなき事する船人にもある哉。
得しらでかく云とおぼして。
我ゆみの力は。
龍あらば
ふといころして首の玉は(いイ)とりてん。
をそくるやつばらをまたじとの給ひて。
- [581] 船に乗りて、
海ごとにありき給ふに、
[582] いと遠くて、
[583] 筑紫の方の海に漕ぎいで給ひぬ。
- 船にのりて
海ごとにありき給ふに。
いと遠くて。
筑紫のかたの海に漕出給ひぬ。
- [584] いかゞしけん、
[585] はやき風吹きて、
[586] 世界くらがりて、
[587] 船を吹きもてありく。
- いかゞしけむ。
はやき風吹て。
世界くらがりて。
船を吹もてありく。

- [588] いづれの方とも知らず、
 [589] 船を海中にまかり入りぬべくふき廻して、
 [590] 浪は船にうちかけつゝまき入れ、
 [591] 神は落ちかゝるやうに閃きかゝるに、
 [592] 大納言は惑ひて、
 [593] 「まだかゝるわびしきめハ見ず。
 [594] いかならんとするぞ。」との給ふ。
- [595] 楫取答へてまをす、
 [596] 「こゝら船に乗りてまかりありくに、
 [597] まだかくわびしきめを見ず。
 [598] 御(み)船海の底に入らずは
 神落ちかゝりぬべし。
 [599] もしさいはひに神の助けあらば、
 南海にふかれおはしぬべし。
 うたてある
 [600] 主(しう)の御(み)許に
 仕へ奉(まつ)りて、
 [601] すゞろなる死(し)にを
 すべかめるかな。」
 とて、楫取なく。
- [602] 大納言これを聞きての給はく、
 [603] 「船に乗りては
 楫取の申すことをこそ
 高き山ともたのめ。
 [604] などかくたのもしげなきことを申すぞ。」
 と、あをへどをつきての給ふ。
- [605] 楫取答へてまをす、
 [606] 「神ならねば
 何業をか仕(つかうまつ)らん。
 [607] 風吹き浪はげしけれども、
 [608] 神さへいたゞきに
 落ちかゝるやうなるは、
 [609] 龍を殺さんと
 求め給ひさぶらへばかくあんなり。
 [610] はやても龍の吹かするなり。
 [611] はや神に祈り給へ。」といへば、
- [612] 「よきことなり。」とて、
 [613] 「楫取の御(おん)神聞しめせ。
 [614] をちなく心幼く
 [615] 龍を殺さんと思ひけり。
 [616] 今より後は
 毛一筋をだに
 [617] 動し奉らじ。」と、
 [618] 祝詞(よごと)をはなちて、
 [619] 立居なく、呼ばひ給ふこと、
 [620] 千度(ちたび)ばかり
 申し給ふけにやあらん、
 [621] やう、神なりやみぬ。
 [622] 少しあかりて、
 [623] 風はなほはやく吹く。
- [624] 楫取のいはく、
 [625] 「これは龍のしわざにこそありけれ。
 [626] この吹く風はよき方の風なり。
 [627] あしき方の風にはあらず。
 [628] よき方へおもむきて吹なりといへども、
 [629] 大納言は是を聞き入れ給はず。
- いづれのかたともしらず。
 舟を海中にまかり入ぬべく吹まはして。
 波は船に打かけつゝまき入。
 神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに。
 大納言はまどひて。
 まだかゝる佗しきめ・[はイ]みず。
 いかならんとするぞとのたまふ。
- 楫とりこたへて申。
 こゝら舟にのりてまかりありくに。
 まだかく佗しきめを見ず。
 御船海のそこにいらば
 神おちかゝりぬべし。
 もし幸に神のたすけあらば
 南海にふかれおはしぬべし。
 うたてある
 主のみもとに
 つかふまつりて。
 すゞろなるしにを
 すべかめるかな
 とかちとりなく。
- 大納言是を聞ての給く。
 船に乗ては
 楫とりの申ことをこそ
 高き山ともたのめ。
 などかくたのもしげなき事を申ぞ
 とあをへどをつきての給ふ。
- かぢ取答て申。
 神ならねば
 何わざをかつかふまつらむ。
 風吹波はげしけれども。
 神さへいたゞきに
 おちかゝるやうなるは。
 辰を殺さんと
 救[求イ]給ふ故にある也。
 はやても龍のふかするなり。
 はや神にいのり給へといふ。
- よき事也とて。
 楫とりの御神きこしめせ。
 をと[ちイ]なく心おさなく。
 龍をころさむと思ひけり。
 今より後は。
 けのすぢ(鬚イ)一すぢをだに
 うごかしたてまつらじと。
 よごとをはなちて。
 たちゐなく、よばひ給ふこと。
 千度ばかり
 申給ふけにやあらん。
 漸々神なりやみ。
 すこし光て。
 風は猶はやく吹く。
- 楫取のいはく。
 是はたつのしわざにこそありけれ。
 此吹風はよき方の風也。
 悪敷かたのかぜにはあらず。
 よき方へおもむきて吹なりといへども。
 大納言は是を聞入給はず。

- [630] 三四日(みかよか)ありて
吹き返しよせたり。 三四日ふきて
吹かへしよせたり。
- [631] 濱を見れば、
播磨の明石の濱なりけり。 濱をみれば
播磨のあかしの濱なり。 大納言
- [632] 「南海の濱に吹き寄せられたるにやあらん。」
と思ひて、 南海の濱に吹よせられたるにやあらむ
とおもひて。 大納言
- [633] 息つき伏し給へり。 いきつきふし給へり。
- [634] 船にある男ども 舟にある男ども
國に告げたれば、 國につきたれども
國の司まうで訪ふにも、 國の司まうでとぶらふにも。
- [635] えおきあがり給はで、 えおきあがり給はで。
- [636] 船底にふし給へり。 ふなぞこに臥たまへり。
- [637] 松原に御み筵敷きておろし奉る。 松原に御むしろ敷ておろし奉る。
- [638] その時にぞ 其時にぞ
「南海にあらざりけり。」と思ひて、 南海にあらざりけりとおもひて。
- [639] 辛うじて起き上り給へるを見れば、 からうじておきあがりたまへるを見れば。
- [640] 風いとおもき人にて、 風いとおもき人にて。
- [641] 腹いとふくれ、 はらいとふくれ。
- [642] こなたかなたの目には、 こなたかなたの目には。
- [643] 李を二つつけたるやうなり。 すもゝを二つつけたる様也。
- [644] これを見奉りてぞ、 是をみたまつりてぞ
國の司もほゝゑみたる。 國の司もほゝえみたる。
- [645] 國に仰せ給ひて、 國におほせ給ひて
腰輿(たごし)作せたまひて、 たごしつらせ給ひて。
- [646] によぶ／＼になはれて 漸々[によぶ / \イ]になはれたまひて。
- [647] 家に入り給ひぬるを、 家に入たまひぬるを。
- [648] いかで聞きけん、 いかでか聞きけん。
- [649] 遣し男ども参りて申すやう、 つかはしし男どもまいりて申すやう。
- [650] 「龍の首の玉をえとらざりしかばなん、 龍のくびの玉をえとらざらしかば。
- [651] 殿へもえ参らざりし。 南海へもまいらざりし。
- [652] 『玉のとり難かりしことを 玉の取がたかりし事を
知り給へればなん、 しり給へればなん。
- [653] 勘當あらじ。』 かむだうあらじ
とて参りつる。」と申す。 とて参つると申す。
- [654] 大納言起き出でての給はく、 大納言起出のたまはく。
- [655] 「汝等よくもて来ずなりぬ。 なむぢらよくもてこずなりぬ。
- [656] 龍は鳴神の類にてこそありけれ。 たつはなる神のるいにこそ有けれ。
- [657] それが玉をとらんとて、 それが玉をとらむとて。
- [658] そこの人々の そこの人々の
害せられなんとしけり。 がいせられむとしけり。
- [659] まして龍を捕へたらましかば、 ましてたつをとらへたらましかば。
- [660] またこともなく 又とこ[ことイ]もなく
我は害せられなまし。 我はがいせられなまし。
- [661] よく捕へずなりにけり。 よくとらへずやみ(なり)にける(リイ)。
- [662] かぐや姫てふ大盗人のやつが、 かぐや姫てふおほ盗人のやつが。
- [663] 人を殺さんとするなりけり。 人をこるさむとする也けり。
- [664] 家のあたりだに今は通らじ。 家のあたりだに今はとをらじ。
- [665] 男どもなありきそ。」とて、 男どもなありきそとて。
- [666] 家に少残りたりけるものどもは、 家に少残りたりける物どもは。
- [667] 龍の玉をとらぬものどもにたびつ。 龍の玉をとらぬものどもにたびつ。
- [668] これを聞きて、 是を聞て。
- [669] 離れ給ひしものうへは、 はなれ給ひしもの上は。
- [670] 腹をきりて笑ひ給ふ。 はらをきりて(斷腸)わらひ給ふ。
- [671] 糸をふかせてつくりし屋は、 いとをふかせてつくりし屋は。
- [672] 鳶鳥の巢に とびからすの巢に
皆咋(く)ひもていにけり。 みなくひもていにけり。

- | | | |
|-------|--------------------|---------------------|
| [673] | 世界の人のいひけるは、 | 世界の人のいひけるは。 |
| [674] | 「大伴の大納言は、 | 大とも(伴イ)の大納言は。 |
| [675] | 龍の玉やとりておはしたる。」 | 龍の首の玉や取ておはしたる。 |
| [676] | 「いなさもあらず。 | いなさもあらず。 |
| | 御眼(おんまなこ)二つに | みまなこ二つに |
| [677] | 李のやうなる玉をぞ | すもゝのやうなる玉を・[ぞイ] |
| | 添へていましたる。」 | そへていましたる |
| | といひければ、 | といひければ。 |
| [678] | 「あなたへがた。」といひけるよりぞ、 | あなたへがたといひけるよりぞ。 |
| [679] | 世にあはぬ事をば、 | 世にあはぬ事をば |
| | あなたへがたとはいひ始めける。 | ・[あなイ]堪がたとはいひはじめける。 |

8. 石上麻呂

- | | | |
|-------|-----------------------------------|--------------------------------------|
| [680] | 中納言 石上麻呂は、 | 中納言 磯のかみのまろたり[もろたかイ]は。 |
| [681] | 家につかはるゝ男どもの許に、 | 家につかはるゝをのこどものもとに。 |
| [682] | 「燕(つばくらめ)の 巢くひたらば告げよ。」 | つばくらめの すくひたらばつげよ |
| | との給ふを、うけたまはりて、 | との給ふを承て。 |
| [683] | 「何の料にかあらん。」と申す。 | 何の用にかあらむと申。 |
| [684] | 答へての給ふやう、 | こたへての給ふやう。 |
| [685] | 「燕のもたる子安貝 とらん料なり。」との給ふ。 | つばくらめのもたるこやすの(イ无)かひ をとらんれうなりとの給ふ。 |
| [686] | 男ども答へて申す、 | をのこどもこたへて申。 |
| [687] | 「燕を 數多殺して見るにだにも、 腹になきものなり。」 | つばくらめを あまたころしてみるにだにも 腹になき物也。 |
| [688] | たゞし子産む時 | たゞし子うむ時 |
| [689] | なんいかでかいだすらん、 | なんいかでかいだすらん。 |
| [689] | はらゝと | はう / \ かと申。 |
| [690] | 人だに見れば失せぬ。」と申す。 | 人だにみればうせぬと申。 |
| [691] | 又人のまをすやう、 | 又人申やう。 |
| [692] | 「大炊寮(おほゐづかさ)の 飯炊ぐ屋の棟の | おほいづかさの いひかしぐ屋のむねに[のイ]。 |
| [693] | つくの穴毎に | つくのあなごとに |
| [694] | 燕は巢くひ侍り。 | つばくらめは巢をくひ侍る。 |
| [694] | それにまめならん男どもを | それにまめならんをのこどもを |
| | ゐてまかりて、 | ゐてまかりて。 |
| [695] | あぐらをゆひて上げて | あぐらをゆひあげて |
| | 窺はせん、 | うかどはせん。 |
| [696] | そこの燕子 | そこのつばくらめを |
| | うまざらんやは。 | うまざらむやは。 |
| [697] | さてこそとらしめ給はめ。」と申す。 | 扱こそとらしめ給はめと申。 |
| [698] | 中納言喜び給ひて、 | 中納言よろこびたまひて。 |
| [699] | 「をかしき事にもあるかな。 | おかしき事にも有哉。 |
| [700] | もともえ知らざりけり。 | 尤えしらざりけり。 |
| [701] | 興あること申したり。」との給ひて、 | けうある事申たりとの給ひて。 |
| [702] | まめなる男ども | まめなるをのこども |
| | 二十人ばかり遣して、 | 廿人ばかりつかはして。 |
| [703] | あなゝひに上げすゑられたり。 | あなゝひにあげすへられたり。 |
| [704] | 殿より使ひまなく給はせて、 | とのより使隙なくたまはせて。 |
| [705] | 「子安貝とりたるか。」 | こやすの[イ无]かひとりたるか |
| | と問はせ給ふ。 | ととはせ給ふ。 |

- [706] 「燕も
人の數多のぼり居たるにおぢて、
- [707] 巢にのぼりこず。」
- [708] かゝるよしの御返事を申しければ、
- [709] 聞き給ひて、
- [710] 「いかゞすべき。」
と思しめし煩ふに、
- [711] かの寮の官人(くわんじん)
くらつ磨と申す翁申すやう、
- [712] 「子安貝
とらんと思しめさば、
- [713] たばかり申さん。」とて、
- [714] 御前に参りたれば、
- [715] 中納言
額を合せてむかひ給へり。
- [716] くらつ磨が申すやう、
- [717] 「この燕の子安貝は、
- [718] 悪しくたばかりてとらせ給ふなり。
- [719] さてはえとらせ給はじ。
- [720] あなゝひにおどろしく、
二十人の人ののぼりて侍れば、
- [721] あれて寄りまうで来ずなん。
- [722] せさせ給ふべきやうは、
- [723] このあななひを毀ちて、
人皆退きて、
- [724] まめならん人一人を
荒籠(あらこ)に載せずゑて、
- [725] 綱をかまへて、鳥の子産まん間に
綱を釣りあげさせて、
- [726] ふと子安貝をとらせ給はんなん
- [727] よかるべき。」と申す。
- [728] 中納言の給ふやう、
- [729] 「いとよきことなり。」とて、
- [730] あなゝひを毀ちて、
- [731] 人皆歸りまうできぬ。
- [732] 中納言くらつ磨にの給はく、
- [733] 「燕はいかなる時にか
子を産むと知りて、
人をばあぐべき。」とのたまふ。
- [734] くらつ磨申すやう、
- [735] 「燕は子うまんとする時は、
尾をさゝげて
- [736] 七度廻りて
なん産み落すめる。
- [737] さて七度廻らんをりひき上げて、
そのをり子安貝はとらせ給へ。」と申す。
- [738] 中納言喜び給ひて、
- [739] 萬の人にも知らせ給はで、
みそかに寮にいまして、
- [740] 男どもの中に交りて、
- [741] 夜を晝になしてとらしめ給ふ。
- [742] くらつ磨かく申すを、
いといたく喜び給ひての給ふ、
- [743] 「こゝに使はるゝ人にもなきに、
願をかなふことの嬉しさ。」
と宣ひて、
- [744] 御衣(おんぞ)ぬぎてかづけ給ひつ。
- つばくらめも
人あまたのぼりゐたるにおぢて。
すにものぼりこず。
かゝるよしの御返事を申たれば。
聞き給ひて。
如何すべき
とおぼしめし煩ふに。
- 彼つかさのくわん人
くらつまろと申翁申すやう。
こやすの(イ无)かひ
とらむとおぼしめさば。
たばかり申さむとて。
御前に参たれば。
中納言
額を合てむかひゐたまへり。
くらつまろが申すやう。
此燕めこやすのかひは。
あしくたばかりてとらせ給ふ也。
扱はえとらさ(イ无)せたまはじ。
あなゝひにおどろおどろしく
廿人のひとゞののぼりて侍るなれば。
あれてよりまうでこず・[なりイ]。
せさせ給ふべきやうは。
此あなゝひをこぼちて
人みなしりぞきて。
まめならむ人を
あらこにのせずへて。
つなをかまへて鳥のこうまん間に
つなをつりあげさせて。
ふとこやすの[イ无]かひをとらせ給なん。
よき事なる[ばよかるイ]べきと申。
- 中納言の給ふやう。
いとよき事なりとて。
あなゝひをこぼし。
人みなかへりまうできぬ。
- 中納言くらつまろにの給はく。
つばくらめはいかなる時にか
子うむとしりて
人をばあぐべきとのたまふ。
- くらつまろ申すやう。
つばくらめ子うまむとする時は。
おをさ・[さい]げて
七度めぐりて
なんうみおとすめる。
扱七度めぐらんおり
ひきあげてそのおり
こやすの(イ无)貝はとらせたまへと申。
- 中納言喜て。
よろづの人にもしらせ給はで
みそかにつかさにいまして。
をのこどもの中にまじりて。
夜をひるになしてとらしめ給ふ。
くらつまろかく申を
いといたく喜ての給ふ。
こゝにつかはるゝ人にもなきに
ねがひをかなふことのうれしさ
との給ひて。
御ぞぬぎてかづけ給つ。

- [745] 更に「夜さりこの寮にまうでこ。」
とのたまひて遣しつ。
日暮れぬれば、
[746] かの寮におはして見給ふに、
誠に燕巢作れり。
- [747] くらつ麿申すやうに、
[748] 尾をさゝげて廻るに、
荒籠に人を載せて
[749] 釣りあげさせて、
燕の巢に手をさし入れさせて探るに、
[750] 「物もなし。」と申すに、
中納言
[751] 「悪しく探ればなきなり。」と腹立ちて、
「誰ばかりおぼえんに。」とて、
[752] 「我のぼりて探らん。」とのたまひて、
- [753] 籠にのりてつられ登りて
窺ひ給へるに、
[754] 燕尾をさゝげて
いたく廻るに合せて、
[755] 手を捧げて探り給ふに、
[756] 手にひらめるものさをはる時に、
[757] 「われ物握りたり。
[758] 今はおろしてよ。
[759] 翁しえたり。」との給ひて、
集りて「疾くおろさん。」とて、
[760] 綱をひきすぐして、
綱絶ゆる、即
[761] やしまの鼎の上
のけざまに落ち給へり。
- [762] 人々あさましがりて、
[763] 寄りて抱へ奉れり。
[764] 御目はしらめにてふし給へり。
[765] 人々御(み)口に水を掬ひ入れ奉る。
- [766] 辛うじて息いで給へるに、
[767] また鼎の上より、
[768] 手とり足とりしてさげおろし奉る。
辛うじて
[769] 「御(み)心地はいかゞおぼさるゝ。」
と問へば、
[770] 息の下にて、
[771] 「ものは少し覺ゆれど
[772] 腰なん動かれぬ。
[773] されど子安貝をふと握りもたれば
嬉しく覺ゆるなり。
[774] まづ脂燭さしてこ。
[775] この貝顔(かひがほ)みん。」と、
御ぐしもたげて御手をひろげ給へるに、
[776] 燕のまりおける
古糞を握り給へるなりけり。
- [777] それを見給ひて、
[778] 「あなかひなのわざや。」
との給ひけるよりぞ、
[779] 思ふに違ふこと
をば、かひなしとはいひける。
- さらによさり此司にまうでこ
との給ひてつかはしつ。
日暮れぬれば
かのつかさにおはして見給ふに
誠につばくらめ巢つくれり。
- くらつまろ申やう・[にイ]。
おうけて[をさゝげイ]めぐるに。
あらこに人をのぼせて
つりあげさせて
つばくらめの巢に手をさし入させてさぐるに。
物もなしと申に。
中納言
あしくさぐればなきなりと腹立て
たればかりおぼふらんにとて。
われのぼりてさぐらむとの給ひて。
- 籠に入てつられのぼりて
うかゞひ給へるに。
つばくらめ尾をさげ[さゝげイ]て
いたくめぐりけるにあはせて。
手をさゝげてさぐり給ふに。
・[手にイ]ひらめる物さはりけるとき。
我物にぎりたり。
今はおろしてよ。
おきなしえたり[イ无]との給ひて。
あつまりてとくおろさんとして
綱を引すぐして
つなたゆるとき[すなはちにイ]に。
やしまのかなへのうへに
のけざまにおちたまへり。
- 人々あさましがりて。
寄てかゝへたてまつれり。
御目はしらめにてふし給へり。
人々水をすくひ入たてまつれり。
- からうじていき出給るに。
又かなへの上より。
とりあしとりしてさげおろし奉る。
からうじて
御心ちはいかゞおぼさるゝ
ととへば。
息の下にて。
物はすこしおぼゆれど。
こしなむうごかれぬ。
されどこやすのかひをふとにぎりもたれば
嬉敷おぼゆれ[ゆるなりイ]。
まづしそくさしてこ。
このかひがほ(貝面)見むと
御ぐしもたげ御手をひろげ給へるに。
つばくらめのまりおける
ふるくそをにぎり給へるなりけり。
- それを見給ひて。
あなかひなのわざや
との給ひけるよりぞ。
思ふにたがふ事
をばかひなしといひける。

- [780] 「かひにもあらず。」と見給ひけるに、
 [781] 御こゝちも違ひて、
 [782] 唐櫃の蓋に入れられ給ふべくもあらず、
 [783] 御腰は折れにけり。
- かひにもあらずと見給ひけるに。
 御心ちもたがひて。
 からびつのふたに入れられ給ふべくもあらず。
 御こしはおれにけり。
- [784] 中納言は
 いはけたるわざして、病むことを
 [785] 人に聞かせじとし給ひけれど、
 [786] それを病にていと弱くなり給ひにけり。
 [787] 貝をえとらずなりにけるよりも、
 [788] 人の聞き笑はんことを、
 [789] 日にそへて思ひ給ひければ、
 [790] たゞに病み死ぬるよりも、
 人ぎき恥(はづか)しく覚え給ふなりけり。
- 中納言は
 はら[いはイ]はげたるわざしてやむことを。
 人にきかせじとしたまひけれど。
 それをやまひにていとよはく成たまひけり。
 かひをもとらずなりにける[よりも]。
 人の聞き笑はん]事を。
 日に添て思ひ給ひければ。
 たゞにやみしぬるよりも
 人聞媿敷おぼえ給ふ成けり。
- [791] これをかぐや姫聞きて
 [792] とぶらひにやる歌、
- 是をかぐや姫聞て。
 とぶらひにやる歌。
- ♪10 [793] 年を経て
 浪立ちよらぬすみのえの
 まつかひなしと
 聞くはまことか
- 年をへて
 浪立よらぬすみのえの
 まつかひなしと
 きくは誠か
- [794] とあるをよみて聞かす。
- とあるをよみてきかす。
- [795] いと弱き心地に頭もたげて、
 [796] 人に紙もたせて、
 [797] 苦しき心地に辛うじてかき給ふ。
- いとよはき心にかしらもたげて。
 人にかみをもたせて。
 くるしき心ちにからうじて書給ふ。
- ♪11 [798] かひはかく
 ありけるものをわびはてゝ
 死ぬる命を
 すくひやはせぬ
- かひはなく
 有ける物をわひはてゝ
 しぬる命を
 救ひやはせぬ
- [799] と書きはてゝ絶え入り給ひぬ。
- と書はてゝたえ入給ひぬ。
- [800] これを聞きて、
 [801] かぐや姫少し哀(あはれ)とおぼしけり。
 [802] それよりなん少し嬉しきことをば、
 かひありとはいひける。
- 是を聞て。
 かぐや姫少哀とおぼしけり。
 それよりなん少嬉しきことを
 ばかひあるとはいひけり。

9. 帝

- [803] さてかぐや姫かたち
 世に似ずめでたきことを、
 [804] 帝聞しめして、
 [805] 内侍中臣のふさ子にの給ふ、
 [806] 「多くの人の身を徒になして
 あはざなるかぐや姫は、
 [807] いかばかりの女ぞ。」と、
 「罷りて見て参れ。」との給ふ。
- 扱かぐや姫かたちの
 世ににずめでたき事を。
 御門聞しめして。
 ないしなかとみのふさ子にの給。
 多くの人の身を徒になして
 あはざなる[イ无]かぐや姫は。
 いかばかりの女ぞと
 ・(まかりてイ)見てまいれとの給ふ。
- [808] ふさ子承りてまかれり。
 [809] 竹取の家に
 [810] 畏まりて請じ入れてあへり。
- ふさ子承てまかれり。
 竹取の家に。
 畏てしやうじ入てあへり。
- [811] 姫に内侍のたまふ、
 [812] 「仰ごとに、
- 女にないしの給。
 仰ごとに。

- [813] かぐや姫の容いうにおはすとなり。 かぐや姫のかたちいうにおはすなり。
 [814] 能く見て参るべきよしの給はせつるに よくみてまいるべきよしの給はせつるに
 なん参りつる。」といへば、 なむまいりつるといへば。
 [815] 「さらばかくと申し侍らん。」といひて入りぬ。 さらばかくと申し侍らんといひて入ぬ。
- [816] かぐや姫に、 かぐや姫に。
 [817] 「はやかの御使に對面し給へ。」といへば、 はやかの御使に對面し給へといへば。
- [818] かぐや姫、 かぐや姫。
 [819] 「よき容にもあらず。 よきかたちにもあらず。
 [820] いかでか見まみゆべき。」といへば、 いかでか見ゆべきといへば。
 [821] 「うたてもの給ふかな。 うたてもの給ふ物哉。
 帝の御(み)使をば 帝の御使をば
 [822] いかでか疎にせん。」といへば、 いかでかをろかにせむといへば。
 [823] かぐや姫答ふるやう、 かぐや姫こたふるやう。
 [824] 「帝の召しての給はんこと 御門のめしての給はん事。
 [825] かしこしとも思はず。」といひて、 かしこしともおもはずといひて。
 [826] 更に見ゆべくもあらず。 更にみゆべくもあらず。
- [827] うめる子のやうにはあれど、 うめるこの様にあれど。
 [828] いと心恥しげに いと心はづかしげに
 疎(おろそか)なるやうにいひければ、 疎かなるやうにいひければ。
 [829] 心のまゝにもえ責めず。 心の儘にもえせめず。
- [830] 姫、内侍の許にかへり出でて、 女ないしのもとにかへり出でて。
 [831] 「口をしこの幼き者は 口惜き此おさなきものは
 こはく侍るものにて、 こはく侍る物にて。
 [832] 對面すまじき。」と申す。 たいめんすまじきと申。
- [833] 内侍、 ないし。
 [834] 「『必ず見奉りて参れ。』と、 必見たてまつりてまいれと
 仰事ありつるものを、 おほせごとありつるものを。
 [835] 見奉らでは 見たてまつらでは
 いかでか歸り参らん。 いかでかかへりまいらん。
 [836] 國王の仰事を、 國王の仰ごとを。
 [837] まさに世に住み給はん人の まさに世にすみたまはむ人の
 承り給はではありなんや。 承り給はではありなんや。
 [838] いはれぬ事なし給ひそ。」と、 いはれぬ事なし給ひそと。
 [839] 詞はづかしいひければ、 言葉はづかしいひければ。
- [840] これを聞きて、 是を聞て。
 [841] ましてかぐや姫きくべくもあらず。 ましてかぐや姫聞べくもあらず。
 [842] 「國王の仰事を背かば 國王の仰事を背かば。
 [843] はや殺し給ひてよかし。」といふ。 はやころし給ひてよかしといふ。
- [844] この内侍歸り参りて、このよしを奏す。 此内侍歸りまいりて此由をそうす。
 [845] 帝聞しめして、 御門聞食て。
 [846] 「多くの人を殺してける心ぞかし。」 多くの人をころしてける心ぞかし
 との給ひて、 との給てやみにける。
 [847] 止みにけれど、猶思しおはしまして、 されど猶思しおはして。
 「この女(をうな)のたばかりにやまけん。」 此女のたばかりにやまけむ
 [848] と思しめして、 とおもほして
 竹取の翁を召して仰せたまふ、 仰給ふ。
 [849] 「汝が持て侍るかぐや姫を奉れ。 なんちがもちてはんべるかぐや姫奉れ。
 [850] 顔容よしと聞しめして、 かほかたちよしと聞食て
 御使をたびしかど、 御使をたびしかど。
 [851] かひなく見えずなりにけり。 かひなく見えず成にけり。
 [852] かくたい\ / しくやはならはすべき。」 かくたい / しくやはならはすべき
 と仰せらる。 と仰らる。

- [853] 翁畏まりて御返事申すやう、
 [854] 「この女の童は、
 [855] 絶えて宮仕(つかう)
 奉まつるべくもあらず侍るを、
 [856] もてわづらひ侍り。
 [857] さりとも罷りて仰せ給はん。」と奏す。
- 翁かしこまりて御かへり事申様。
 此めのわらはは。
 たえて宮づかへ
 仕べくもあらず侍るを。
 もてわづらひ侍る。
 さりともまかりて仰給はんと奏す。
- [858] 是を聞き召して仰せ給ふやう、
 [859] 「などか翁の手におほしたてたらんものを、
 心に任せざらん。
 [860] この女(め)もし奉りたるものならば、
 [861] 翁に冠(かうぶり)をなどかたばせざらん。」
- 是を聞き召て仰給ふやう。
 などか翁の手におほしたてたらん物を
 心にまかせざらむ。
 此女もし奉りたる物ならば。
 翁にかふむり・[をイ]などかたばせざらん。
- [862] 翁喜びて家に歸りて、
 [863] かぐや姫にかたらふやう、
 [864] 「かくなん帝の仰せ給へる。
 [865] なほやは仕う奉り給はぬ。」といへば、
- 翁喜て家に歸りて。
 かぐや姫にかたらふやう。
 かくなむ帝の仰給へる。
 なをやはつかふまつり給はぬといへば。
- [866] かぐや姫答へて曰く、
 [867] 「もはらさやうの宮仕(つかう)奉まつらじ
 と思ふを、
 [868] 強ひて仕う奉らせ給はゞ
 消え失せなん。
 [869] 御(み)司冠つかう奉りて
 死ぬばかりなり。」
- かぐや姫答ていはく。
 もはらさやうの宮づかへつかふまつらじ
 と思ふを。
 しめてつかふまつらせたまはゞ
 消うせなむず。
 みつかさかふぶりつかふまつりて
 しぬばかり也。
- [870] 翁いらふるやう、
 [871] 「なしたまひそ。
 [872] 官(つかさ)冠も、
 我子を見奉らでは何にかはせん。
 [873] さはありとも
 [874] などか宮仕をし給はざらん。
 [875] 死に給ふやうやはあるべき。」といふ。
- 翁いらふるやう。
 なし給そ。
 つかさかふぶりも
 我こを見たてまつらでは何にかせむ。
 さはありとも。
 などか宮づかへをしたまはざらん。
 しに給ふべきやうやあるべきと云。
- [876] 『なほそらごとか。』と、仕う奉らせて
 [877] 死なずやあると見給へ。
 [878] 數多の人の志疎(おろか)ならざりしを、
 [879] 空しくなしてしこそあれ、
 [880] 昨日今日帝のの給はんことにつかふ、
 [881] 人ぎきやさし。」といへば、
- なをそらごとかとつかまつらせて。
 しなずやあるとみたまへ。
 あまたの人の志をろかならざりしを。
 むなしくなしてしこそあれ。
 きのふ今日帝の宣はん事につかむ。
 人間やさしといへば。
- [882] 翁答へて曰く、
 [883] 「天下の事はとありともかゝりとも、
 [884] 御(おん)命の危きこそ
 大なるさはりなれ。
 [885] 猶仕う奉るまじきことを
 参りて申さん。」とて、
- 翁こたへていはく。
 天下の事はとありともかゝりとも。
 身(御イ)命のあやうさこそ
 大きなさはりなれば。
 なをかうつかふまつるまじき事を
 まいりて申さむとて。
- [886] 参りて申すやう、
 [887] 「仰の事のかしこさに、
 [888] かの童を参らせん
 とて仕う奉れば、
 [889] 『宮仕に出したてなば死ぬべし。』とまをす。
 [890] 造磨が手にうませたる子にてもあらず、
 [891] 昔山にて見つけたる。
 [892] かゝれば心ばせも世の人に似ぞ侍る。」
 と奏せさす。
- まいりて申様。
 仰ごとのかしこさに。
 かのわらはをまいらせむ
 とてつかふまつれば。
 宮仕に出奉候はゞ死ぬべしと申。
 宮つこまろがてにうませたるこにてあらず。
 昔山にて見つけたる。
 かゝれば心操もよの人に似ぞ侍る
 と奏せさす。

- [893] 帝おほせ給はく、 御門仰給はく。
 [894] 「造磨が家は山本近かなり。 宮つこまろが家は山本ちかくなり。
 [895] 御(み)狩の行幸(みゆき)し給はん 御狩行幸し給はん
 やうにて見てんや。」とのたまはず。 やうにて見てむやとのたまはず。
- [896] 造磨が申すやう、 宮つこまろが申様。
 [897] 「いとよきことなり。 いとよき事也。
 [898] 何か心もなくて侍らんに、 何か心もなくて侍らむに。
 [899] ふと行幸して御覽ぜられなん。」 ふと御幸して御覽ぜられなん
 と奏すれば、 と奏すれば。
- [900] 帝俄に日を定めて、御狩にいで給ひて、 御門俄に日を定て御狩に出給ひて。
 [901] かぐや姫の家に入り給ひて見給ふに、 かぐや姫の家に入給ふて見給ふに
 光満ちてけうらにて居たる人あり。 光みちてけうらにてゐたる人あり。
 [902] 「これならん。」とおぼして、 是ならんと思して、
 近くよらせ給ふに、
- [903] 逃げて入る、袖を捕へ給へば、 にげて入袖をとりてをさへ給へば。
 [904] おもてをふたぎて候へど、 面をふたぎて候へど。
 [905] 初よく御覽じつれば、 始よく御覽じつれば。
 [906] 類なくおぼえさせ給ひて、 たぐひなくめでたくおぼえさせ給ひて。
 [907] 「許さじとす。」とて ゆるさじとすとて。
 [908] 率ておはしまさんとするに、 ゐておはしまさむとするに。
- [909] かぐや姫答へて奏す、 かぐや姫こたへてそうす。
 [910] 「おのが身は をのが身は。
 [911] この國に生れて侍らばこそ仕へ給はめ、 此國に生れて侍らばこそつかひ給はめ。
 [912] いとゐておはし難くや侍らん。」と奏す。 いとゐておはしましがたくや侍らんとそうす。
- [913] 帝 御門。
 [914] 「などかさあらん。 などかさあらん。
 [915] 猶率ておはしまさん。」とて、 なをゐておはしまさむとて。
 [916] 御(おん)輿を寄せたまふに、 御こしをよせ給ふに。
 [917] このかぐや姫きと影になりぬ。 此かぐや姫きとかげになりぬ。
- [918] 「はかなく、口をし。」とおぼして、 はかなく口惜とおぼして。
 [919] 「げにたゞ人にはあらざりけり。」とおぼして、 げにたゞ人にはあらざりけりとおぼして。
 [920] 「さらば御供には率ていかじ。 さらば御ともにはゐていかじ。
 [921] もとの御かたちとなり給ひね。 もとの御かたちとなり給ひね。
 [922] それを見てだに歸りなん。」と仰せらるれば、 それをみてだにかへりなんと仰らるれば。
 [923] かぐや姫もとのかたちになりぬ。 かぐや姫もとのかたちに成ぬ。
- [924] 帝なほめでたく思し召さるゝこと 御門猶めでたくおぼしめさるゝ事
 せきとめがたし。 せきとめがたし。
 [925] かく見せつる造磨を悦びたまふ。 かくみせつる宮つこまろを悦給ふ。
- [926] さて仕うまつる百官の人々に、 扱つかふまつる百官人に
 あるじいかめしう仕う奉る。 あるじいかめしうつかふまつる。
 [927] 帝かぐや姫を留めて歸り給はんことを、 御門かぐや姫をとめて歸りたまはむ事を
 飽かず口をしおぼしけれど、 あかずちおしくおぼしけれど。
 [928] たましひを留めたる心地して 魂をとめたる心ちして
 なん歸らせ給ひける。 なむかへらせ給ひける。
- [929] 御(おん)輿に奉りて後に、 御こしにたてまつりて後に。
 [930] かぐや姫に、 かぐや姫に。
- ♪12 [931] かへるさの 御幸物うくおもほえて
 みゆき物うくおもほえて 背てとまる
 そむきてとまる かくや姫ゆへ
 かぐや姫ゆへ

- [932] 御返事を、 御返り事。
- ♪13 [933] 葎はふ 下にもしは経ぬる身の
なにかはたまの 何かは玉の
うてなをもみむ 臺をは(もイ)見む
- [934] これを帝御覽じて、 これを御門御覽じて。
[935] いとゞ歸り給はんそらもなくおぼさる。 いと[かイ]ゞ歸り給はむ空もなくおぼさる。
- [936] 御心は 更に立ち歸るべくもおぼされざりけれど、 更に立かへるべくもおぼされざりけれど。
[937] さりとて夜を明し給ふべきにもあらねば、 去とて夜をあかし給ふべきにもあらねば。
[938] 歸らせ給ひぬ。 かへらせ給ひぬ。
- [939] 常に仕う奉る人を見給ふに、 常につかふまつる人を見給ふに。
[940] かぐや姫の傍(かたはら)に かがや姫の傍に
寄るべくだにあらざりけり。 よるべくだにあらざりけり。
[941] 「こと人よりはけうらなり。」 こと人よりもけうらなり
とおほしける人の、 とおほしける人の。
[942] かれに思しあはずれば かれにおほしあはずれば。
[943] 人にもあらず。 人にもあらず。
[944] かぐや姫のみ御心にかゝりて、 かがや姫のみ御心にかゝりて。
[945] たゞ一人過したまふ。 唯獨すご(みイ)し給ふ。
- [946] よしなくて御方々にもわたり給はず、 よしなくて御かたゞにもわたり給はず。
[947] かぐや姫の御(おん)許にぞ かがや姫の御もとにぞ
御文を書いて通はさせ給ふ。 御文を書いてかよはさせ給ふ。
[948] 御返事さすがに憎からず 御かへりさすがににくからず
聞えかはし給ひて、 きこえかはし給ひて。
[949] おもしろき木草につけても、 おもしろき木草につけても。
[950] 御歌を詠みてつかはす。 御歌を讀てつかはす。

10. 月見

- [951] かやうにて、 かやうにて。
[952] 御心を互に慰め給ふほどに、 御心を互に慰め給ふほどに。
[953] 三年ばかりありて、 三年計有て。
[954] 春の初より、かぐや姫 春の初よりかぐや姫
月のおもしろう出でたるを見て、 月の面白う出たるをみて。
[955] 常よりも物思ひたるさまなり。 常よりも物おもひたるさまなり。
- [956] ある人の ある人の。
[957] 「月の顔見るは忌むこと。」と 月のかほみるはいむ事と
制しけれども、 せいしけれども。
[958] ともしれば ともしれば。
[959] ひとまには [もイ] 人まには[もイ]
月を見ていみじく泣き給ふ。 月をみていみじく啼給ふ。
- [960] 七月(ふみづき)のもちの月にいで居て、 七月十五日の月にいで居て。
[961] 切に物思へるけしきなり。 せちに物おもへるけしきなり。
[962] 近く使はるゝ人々、 近くつかはるゝ人。
[963] 竹取の翁に告げていはく、 竹取の翁につげていはく。
[964] 「かぐや姫 かがや姫
例も月をあはれがり給ひけれども、 例も月を哀がり給けれども。
[965] この頃となりては ・[このイ]頃と成ては。
[966] たゞ事にも侍らざり。 たゞ事にも侍らざり。
[967] いみじく思し歎くことあるべし。 いみじくおぼしなげく事あるべし。

- [968] よく／＼見奉らせ給へ。」
といふを聞きて、
- [969] かぐや姫にいふやう、
- [970] 「なでふ心ちすれば、
- [971] かく物をおもひたるさまにて
月を見給ふぞ。
- [972] うましき世に。」といふ。
- [973] かぐや姫、
- [974] 「月を見れば
世の中こゝろぼそくあはれに侍り。
- [975] なでふ物をおもひたるべき。」といふ。
- [976] かぐや姫のある所に至りて見れば、
なほ物思へるけしきなり。
- [977] これを見て、
- [978] 「あが佛何事を思ひ給ふぞ。
- [979] 思すらんこと何事ぞ。」といへば、
- [980] 「思ふこともなし。
- [981] 物なん心細く覺ゆる。」といへば、
- [982] 翁、
- [983] 「月を見給ひそ。
- [984] これを見給へば
物思すけしきはあるぞ。」といへば、
- [985] 「いかでか月を見ずにはあらん。」とて、
- [986] なほ月出づれば、いで居つゝ歎き思へり。
- [987] 夕闇(ゆふやみ)には物思はぬ氣色なり。
- [988] 月の程になりぬれば、
- [989] 猶時々はうち歎きなきなどす。
- [990] 是をつかふものども、
「猶物思すことあるべし。」とさゝやけど、
- [991] 親を始めて何事とも知らず。
- [992] 八月(はつき)十五日(もち)ばかりの
月にいで居て、
かぐや姫いといたく泣き給ふ。
- [993] 人めも今はつゝみ給はず泣き給ふ。
- [994] これを見て、
- [995] 親ども「何事ぞ。」と問ひさわぐ。
- [996] かぐや姫なく／＼いふ、
- [997] 「さき／＼も申さんと思ひしかども、
『かならず心惑はし給はんものぞ。』
と思ひて、今まで過し侍りつるなり。
- [998] 『さのみやは。』とてうち出で侍りぬるぞ。
- [999] おのが身はこの國の人にもあらず、
- [1000] 月の都の人なり。
- [1001] それを昔の契なりける
によりてなん、
- [1002] この世界にはまうで來りける。
今は歸るべきになりければ、
- [1003] この月の十五日に、
かのもと國より迎に人々まうでこんず。
- [1004] さらずまかりぬべければ、
- [1005] 思し歎かんが悲しきことを、
この春より思ひ歎き侍るなり。」
といひて、いみじく泣く。
- よく／＼見たてまつれ(らせイ)給へ
といふを聞て。
- かぐや姫にいふ様。
- なんでう心ちすれば。
かく物をおもひたる様にて
月を見給ふぞ。
- うましき世にと云。
- かぐや姫。
- 見れば
世間心細く哀に侍る。
なでう物をおもひたるべきと云。
- かぐや姫の有所に到てみれば
猶物おもへるけしきなり。
- 是を見て。
- あがほとけなに事・[をイ]思ひ給ぞ。
おぼすらむ事何事ぞといへば。
- 思ふ事もなし。
物なん心ぼそくおぼゆるといへば。
- 翁。
- 月なみ給そ。
是を見給へば
物おぼすけしきはあるぞといへば。
- いかで月を見ではあらむとて。
猶月出れば出居つゝ歎きおもへり。
- 夕闇には物おもはぬけしき也。
月の程に成ぬれば。
猶時々は打歎きなきなどす。
是をつかふものども
猶物おぼす事あるべしとさゝやけど。
おやを始めて何事とも知らず。
- 八月十五日計の
月に出居て
かぐや姫いといたくなき給ふ。
- 人めも今はつゝみ給はず。
これを見て。
おやども何事ぞととひさはぐ。
- かぐや姫なく／＼云。
- さき／＼も申さむと思ひしかども。
必心まどは(ひイ)したまはん物ぞ
と思ひて今迄すこし侍りつる也。
さのみやはとて打出侍ぬるぞ。
- おのが身は此國の人にもあらず。
月の宮古の人也。
それをなんむかしのちぎりなりける
によりなむ。
- 此世界にはまうできたりける。
今は歸るべきに成にければ
此月の十五日に
かの國よりむかへに人々まうでこんず。
- さらばまかりぬべければ。
おぼしなげかむが悲しき事を。
此春より思ひなげき侍るなり
と云ていみ敷なくを。

- | | | |
|--------|---------------------------------------|--|
| [1008] | 翁「こはなでふことをの給ふぞ。 | 翁こはなでうことの給ふぞ。 |
| [1009] | 竹の中より見つけきこえたりしかど、 | 竹の中よりみつけきこえたりしかど。 |
| [1010] | 菜種の大(おほき)さおはせしを、 | なたねの大きさにおはせしを。 |
| [1011] | 我丈たち並ぶまで養ひ奉りたる 我子を、何人か迎へ聞えん。 | わがたけ立ならぶまでやしなひ奉りたる わが子を何人かむかへきこえむ。 |
| [1012] | まさに許さんや。」といひて、 | まさにゆるさむやといひて。 |
| [1013] | 「我こそ死なぬ。」とて、 | 我こそしなめとて |
| | 泣きのゝしること | 啼言ること。 |
| [1014] | いと堪へがたげなり。 | いとたへがたげなり。 |
| [1015] | かぐや姫のいはく、 | かぐや姫の云。 |
| [1016] | 「月の都の人にて父母ちゝはゝあり。 | 月の古の人にてちゝはゝあり。 |
| [1017] | 片時の間(ま)とて かの國よりまうでこしかども、 | 片時の間とて かの國よりまうでこしかども。 |
| [1018] | かくこの國には 數多の年を経ぬるになんありける。 | かく此國には あまたの年を経ぬるになむありける。 |
| [1019] | かの國の父母の事もおぼえず。 | かの國のちゝはゝのこともおぼえず。 |
| [1020] | こゝにはかく久しく遊び聞えて ならひ奉れり。 | こゝにはかく久敷あそび聞えて ならひ奉れり。 |
| [1021] | いみじからん心地もせず、 | いみじからむ心ちもせず。 |
| [1022] | 悲しくのみなんある。 | かなしくのみある。 |
| [1023] | されど己が心ならず罷りなんとする。」 といひて、諸共にいみじう泣く。 | されどをのが心ならずまかりなんとする といひてもろともにいみじうなく。 |
| [1024] | つかはるゝ人々も | つかはるゝ人々も。 |
| [1025] | 年頃ならひて、 | 年頃ならひて。 |
| [1026] | 立ち別れなんことを、 | たち別なむ事を。 |
| [1027] | 心ばへなどあてやかに 美しかりつることを見ならひて、 | こゝろばへなどあてやかに 美しかりける事をみならひて。 |
| [1028] | 戀しからんことの堪へがたく、 | こひしからん事の堪がたく。 |
| [1029] | 湯水も飲まれず、 | ゆ水のまれず。 |
| [1030] | 同じ心に歎しがりけり。 | おなじ心になげかしがりけり。 |

11. 徒勞

- | | | |
|--------|--------------------------------|-----------------------------|
| [1031] | この事を帝きこしめして、 | 此事を御門聞食て。 |
| [1032] | 竹取が家に御使つかはさせ給ふ。 | 竹とりが家に御使つかはさせ給ふ。 |
| [1033] | 御使に竹取いで逢ひて、 泣くこと限なし。 | 御使にたけとり出合て なく事限なし。 |
| [1034] | この事を歎くに、 | 此事をなげくに。 |
| [1035] | 髪も白く腰も屈り 目もたゞれにけり。 | 髪も白くこしもかゞまり 目もたゞれにけり。 |
| [1036] | 翁今年は 五十許なりけれども、 | おきな今年は 五[ハイ]十ばかりなりしかども。 |
| [1037] | 「物思には片時に なん老(おい)になりける。」と見ゆ。 | 物思にはかた時に なむ老になりけるとみゆ。 |
| [1038] | 御使仰事とて翁にいはく、 | 御使仰ごととて翁にいはく。 |
| [1039] | 「いと心苦しく物思ふなるは、 誠にか。」と仰せ給ふ。 | いと心ぐるしく物思ふなるは まことにかと仰給ふ。 |
| [1040] | 竹取なく／＼申す、 | 竹取なく／＼申。 |
| [1041] | 「このもちになん、 | 此十五日になむ。 |
| [1042] | 月の都より かぐや姫の迎にまうでくなる。 | 月の宮古より かぐや姫のむかひにまうでくなり。 |
| [1043] | たふとく問はせ給ふ。 | たうとくとはせ給。 |
| [1044] | このもちには人々たまはりて、 | 此十五日・[にイ]は人々給りて。 |
| [1045] | 月の都の人まうで来ば | 月の宮古の人々まうでこば。 |
| [1046] | 捕へさせん。」と申す。 | とらへさせむと申。 |
| [1047] | 御使かへり参りて、 | 御使かへりまいりて。 |

- [1048] 翁のありさま申して、
 [1049] 奏しつる事ども申すを
 聞き召しての給ふ、
 [1050] 「一目見給ひし
 御心にだに忘れ給はぬに、
 [1051] 明暮見馴れたるかぐや姫を
 やりてはいかと思ふべき。」
- 翁のあり様申て。
 奏しつる事ども申を
 聞き召ての給ふ。
 一目給ひし
 御心にだにわすれ給はぬに。
 明暮みなれたるかぐや姫を
 やりていかがおもふべき。
- [1052] かの十五日(もちのひ)司々に仰せて、
 [1053] 勅使には少將高野(たかの)大國
 といふ人をさして、
 [1054] 六衛のつかさ合せて、
 二千人の人を竹取が家につかはす。
- 此十五日司々に仰て。
 勅使せうしやう葛(高イ)野のおほくに
 といふ人をさして。
 六衛のつかさ合て
 二千人の人を竹とりが家につかはす。
- [1055] 家に罷りて
 [1056] 築地の上に千人、
 [1057] 屋の上に千人、
 [1058] 家の人々と多かりけるに合はせて、
 [1059] あける隙もなく守らす。
 [1060] この守る人々も弓矢を帯して居り。
 [1061] 母屋の内には女どもを番にすゑて守らす。
 [1062] 姫塗籠の内に
 かぐや姫を抱きて居り。
- 家にまかりて。
 ついちの上に千人。
 屋の上に千人。
 家の人々いとおほくありけるにあはせて。
 あける隙もなくまもらす。
 此守る人々も弓矢をたいして。
 おもやの内には女ども番にをりて守す。
 女ぬりごめの内に
 かぐや姫をいだかへてをり。
- [1063] 翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。
 [1064] 翁のいはく、
 [1065] 「かばかり守る所に、
 [1066] 天(あめ)の人にもまけんや。」といひて、
 [1067] 屋の上に居る人々に曰く、
 [1068] 「つゆも物空にかけらば
 [1069] ふと射殺し給へ。」
- 翁もぬりごめの戸をさして戸口にをり。
 翁いはく。
 かばかり守る所に。
 天の人にもまけむやといひて。
 屋の上にをる人々にいはく。
 露も物空にかけらば。
 ふといころし給へ。
- [1070] 守る人々のいはく、
 [1071] 「かばかりして守る所に、
 蝙蝠(かはほり)一つだにあらば、
 [1072] まづ射殺して
 外にさらさんと思ひ侍る。」といふ。
 [1073] 翁これを聞きて、
 [1074] たのもしがり居り。
- 守る人々のいはく。
 かばかりして守る所に
 かはか[ほイ]りーだにあらば。
 先いころして
 ほかにさらさむとおもひ侍ると云。
 翁これを聞て。
 たのもしがりをり。
- [1075] これを聞きてかぐや姫は、
 [1076] 「鎖し籠めて守り戦ふべきし
 たくみをしたりとも、
 [1077] あの國の人をえ戦はぬなり。
 [1078] 弓矢して射られじ。
 [1079] かくさしこめてありとも、
 [1080] かの國の人こば皆あきなんとす。
 [1081] 相戦はんとすとも、
 [1082] かの國の人來なば、
 [1083] 猛き心つかふ人もよあらじ。」
- 是を聞てかぐや姫は。
 さしこめてまもりたゝかふべきし
 たくみをしたりとも。
 あの國の人えたゝかはぬ也。
 弓やしていられじ。
 かくさしこめてありとも。
 かの國の人こば皆あきなんとす。
 相たゝかはんとすとも。
 かの國の人きなば。
 たけき心つかふ人もよあらじ。
- [1084] 翁のいふやう、
 [1085] 「御(おん)迎へにこん人をば、
 [1086] 長き爪して眼をつかみつぶさん。
 [1087] さが髪をとりてかなぐり落さん。
 [1088] さが尻をかき出でて、
 [1089] こゝらのおほやけ人に見せて
 [1090] 耻見せん。」と腹だちをり。
- 翁のいふやう。
 御むかへにこむ人をば。
 ながきつめしてまなこをつかみつぶさん。
 とさ[イ无]かがみをととりてかなぐりおとさむ。
 さかしりをかきいでて。
 こゝらのおほやけ人に見せて。
 はぢをみせむと腹立おる。

- [1091] かぐや姫いはく、
 [1092] 「聲高になの給ひそ。
 [1093] 屋の上に住る人どもの聞くに、いとまさなし。
 [1094] いますかりつる志どもを、思ひも知らで
 [1095] 罷りなんずることの口をしう侍りけり。
 [1096] 『長き契のなかりければ、
 [1097] 程なく罷りぬべきなめり。』
 [1098] と思ふが悲しく侍るなり。
 [1099] 親たちのかへりみを
 [1100] いさゝかだに仕う奉らで、
 [1101] 罷らん道も安くもあるまじきに、
 [1102] 月頃もいで居て、
 [1103] 今年ばかりの暇を申しつれど、
 [1104] 更に許されぬによりてなん
 [1105] かく思ひ歎き侍る。
 [1106] 御心をのみ惑はして去りなんことの、
 [1107] 悲しく堪へがたく侍るなり。
 [1108] かの都の人は
 [1109] いとけうらにて、
 [1110] 老いもせずなん。思ふこともなく侍るなり。
- [1106] さる所へまからんずるもいみじくも侍らず。
 [1107] 老い衰へ給へるさまを
 [1108] 見奉らざらんこそ戀しからめ。」
 [1109] といひて泣く。
- [1108] 翁、「胸痛きことなしたまひそ。
 [1109] 麗しき姿したる使にもさはらじ。」
 [1110] とねたみをり。

かぐや姫云。
 こは高になの給ひそ。
 屋のうへにをる人共の間にいとまさなし。
 いますかりつる志をおもひもしらで。
 まかりなむずることの口惜う侍りけり。
 ながき契のなかりければ。
 程なくまかりぬべきなめり
 とおもひかなしく侍る也。
 親達のかへりみを
 聊だにつかまつらで。
 まからむ道もやすくもあるまじきに。
 ひごろもいでみて
 今年計の暇を申つれど。
 更にゆるされぬによりてなむ
 かく思ひなげき侍る。
 御心をのみまどはしてさりなん事の。
 かなしく堪がたく侍る也。
 かの都の人は。
 いとけうらに
 おいもせずなむ思ふこともなく侍也。

さる所へまからむずるもいみじくも侍らず。
 老おとろへたまへる様を
 見たてまつらざらんこそ戀しからめ
 といひて・[なくい]。

翁胸に[イ无]いたきことなし給ひそ。
 うるはしき姿したる使にもさか(はい)らじ
 とねたみをり。

12. 降臨

- [1110] かゝる程に宵うちすぎで、
 [1111] 子の時ばかりに、
 [1112] 家のあたり
 [1113] 晝のあかさにも過ぎて光りたり。
 [1114] 望月のあかさを十合せたるばかりにて、
 [1115] ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。
- [1114] 大空より、人雲に乗りておりきて、
 [1115] 地(つち)より五尺ばかりあがりたる程に
 [1116] 立ち連ねたり。
- [1116] これを見て、内外(うちと)なる人の心ども、
 [1117] 物におそはるゝやうにて、
 [1118] 相戦はん心もなかりけり。
 [1119] 辛うじて
 [1120] 思ひ起して、
 [1121] 弓矢をとりたてんとすれども、
 [1122] 手に力もなくなりて、
 [1123] 瘻(な)え屈(かゞま)りたる中(うち)に、
 [1124] 心さかしき者、
 [1125] ねんじて射んとすれども、
 [1126] 外ざまへいきければ、
 [1127] あれも戦はで、
 [1128] 心地たゞしれにしれて守りあへり。
- [1127] 立てる人どもは、
 [1128] 装束(さうぞく)の清らなること物にも似ず。
 [1129] 飛車(とぶくるま)一つ具したり。
 [1130] 羅蓋(らがい)さしたり。
- [1110] かゝる程に宵打過て。
 [1111] ねの時ばかりに。
 [1112] 家のあたり
 [1113] ひるのあかさにも過て光りたり。
 [1114] もち月のあかさ十合たる計にて
 [1115] 有人の毛のあなさへ見ゆるほどなり。
- [1114] 大空より人雲に乘ており来て。
 [1115] つちより五尺計あがりたるほどに
 [1116] たちつらねたり。
- [1116] 是をみて内外なる人の心ども。
 [1117] 物におそはるゝやうにして。
 [1118] あひたゝかはむ心もなかりけり。
 [1119] からうじて。
 [1120] 思ひおこして。
 [1121] 弓矢を取たてむとすれども。
 [1122] 手に力もなく
 [1123] 成てなへかゞ・[まい]りたる中に。
 [1124] 心ざしさかしきもの
 [1125] ねんじていむとすれども。
 [1126] ほかざまへいきければ。
 [1127] あれもたゝかはで。
 [1128] こゝちたゞしれにしれて守あへり。

13. 汝幼き人

- [1130] その中に王とおぼしき人、
 [1131] 「家に造磨まうでこ。」といふに、
 [1132] 猛く思ひつる造磨も、
 [1133] 物に酔ひたる心ちして
 うつぶしに伏せり。
- [1134] いはく、
 [1135] 「汝をさなき人、
 [1136] 聊なる功德を翁つくりけるによりて、
 [1137] 汝が助にとて
 [1138] 片時の程とて降しを、
 [1139] そこの年頃そこの金賜ひて、
 [1140] 身をかへたるが如くなりたり。
 [1141] かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、
 [1142] かく賤しきおのれが許に
 しばしおはしつるなり。
 [1143] 罪のかぎりはてぬれば、
 かく迎ふるを、翁は泣き歎く、
 [1144] あたはぬことなり。
 [1145] はや返し奉れ。」といふ。
- [1146] 翁答へて申す、
 [1147] 「かぐや姫を養ひ奉ること
 二十年あまりになりぬ。
 [1148] 片時との給ふに
 怪しくなり侍りぬ。
 [1149] また他處(ことどころ)に
 かぐや姫と申す人ぞ
 おはしますらん。」といふ。
 [1150] 「こゝにおはするかぐや姫は、
 重き病をし給へば
 え出でおはしますまじ。」と申せば、
- [1151] その返事はなくて、
 [1152] 屋の上に飛車をよせて、
 [1153] 「いざかぐや姫、
 [1154] 穢き所に
 いかでか久しくおはせん。」といふ。
 [1155] 立て籠めたる所の戸
 即たゞあきにあきぬ。
 [1156] 格子ども人はなくして開きぬ。
- [1157] 嫗抱きて居たるかぐや姫
 外(と)にいでぬ。
 [1158] えとゞむまじければ、
 [1159] たゞさし仰ぎて泣きをり。
 [1160] 竹取心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、
 [1161] かぐや姫いふ、
 [1162] 「こゝにも心にもあらでかくまかに、
 昇らんをだに見送り給へ。」といへども、
- [1163] 「何しに悲しきに見送り奉らん。
 [1164] 我をばいかにせよとて、
 棄てゝは昇り給ふぞ。
 [1165] 具して率ておはせぬ。」と、
 泣きて伏せれば、
 [1166] 御心惑ひぬ。
- その中にわうとおぼしき人。
 いへに宮つこまろまふでこといふに。
 たけく思ひつる宮つこまろも。
 物におそひ[ゑひい]たる心ちして
 うつぶしにふせり。
- いはく。
 汝おさなき人。
 いさゝかなるくどくを翁つくりけるによりて。
 汝がたすけにとて。
 片時の程とてくだしを。
 そこの年比そこのこがねたまひて。
 みをかへたるがごと・[くイ]なりにけり。
 かぐや姫はつみをつくり給へりければ。
 かくいやしきをの・[れイ]がもとに
 しばしおはしつる也。
 つみの限はてぬれば
 かくむかふるを翁はなきなげく。
 あたはぬ事也。
 はやいだ(かへイ)し奉れと云。
- 翁こたへて申。
 かぐや姫を養奉る事
 廿餘年に成ぬ。
 かた時との給ふに
 あやしくなり侍りぬ。
 又こと所に
 かぐや姫と申人ぞ
 おはしますらんと云。
 爰におはするかぐや姫は
 おもき病をしたまへば
 えいでおはすまじと申せば。
- その返事はなくて。
 屋のうへにとぶ車よせて。
 いざかぐや姫。
 きたなき所に
 いかでか久しくおはせむと云。
 たてこめたる所の戸
 則たゞあきにあきぬ。
 かうしども人はなくしてあきぬ。
- 女いだきてゐたるかぐや姫
 とに出ぬ。
 えとゞむまじければ。
 たゞさしあふぎてなきをり。
 竹取心まどひてなきふせる所によりて。
 かぐや姫云。
 こゝにも心にもあらでかくまかり
 のぼらんをだに見をくり給へといへども。
- なにしに悲しきにみ送りたてまつらむ。
 我をばいかにせよとて
 捨てはのぼり給ふぞ。
 ぐしてあておはせねと
 啼てふせれば。
 御心まどひぬ。

- [1167] 「文を書きおきてまからん。
 [1168] 戀しからんをり／＼、とり出でて見給へ。」
 [1169] とて、うち泣きて書くことばは、
- ふみをかき置いてまからむ。
 戀しからん折々とり出でてみ給へ
 とて打なきてかく。
 ことばは。
- [1170] 「この國に生れぬるとならば、
 [1171] 歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、
 侍らで過ぎ別れぬること、
 返す／＼／＼本意なくこそ覚え侍れ。」
- この國にむまれぬるとならば。
 なげかせ奉らぬほどまで
 侍らですぎ別侍(ぬイ)るこそ
 かへすがへすほいなくこそおぼえ侍れ。
- [1172] 脱ぎおく衣(きぬ)をかたみと見給へ。
 [1173] 月の出でたらん夜は見おこせ給へ。
 [1174] 見すて奉りてまかる
 [1175] 空よりもおちぬべき心ちす。」と、かきおく。
- ぬぎをくきぬをかたみとみ給へ。
 月の出たらむ夜は見をこせ給へ。
 見すて奉りてまかる。
 そらよりもおちぬべき心ちするとかきをく。

14. 羽衣

- [1176] 天人(あまびと)の中にもたせたる箱あり。
 [1177] 天(あま)の羽衣入れり。
 [1178] 又あるは不死の薬入れり。
- 天人のなかにもたせたるはこあり。
 天の羽衣入れり。
 また有はふしの薬入り。
- [1179] ひとりの天人いふ、
 [1180] 「壺なる御(み)薬たてまつれ。
 [1181] きたなき所のもの食(きこ)しめしたれば、
 御心地あしからんものぞ。」
 とて、持てよりたれば、
- ひとりの天人いふ。
 つぼなる御薬たてまつれ。
 きたなき所の物きこしめしたれば
 御心ちあしからむ物ぞ
 とてもてよりたれば。
- [1182] 聊嘗め給ひて、
 [1183] 少しかたみとて、
 [1184] 脱ぎおく衣に包まんとすれば、
 [1185] ある天人つゝませず、
 御衣(みぞ)をとり出でてきせんとす。
- 聊なめ給て。
 すこしかたみとて
 ぬぎ置給ふきぬにつゝまんとすれば。
 有天人つゝませず。
 みぞをとり出でてきせんとす。
- [1186] その時にかぐや姫
 [1187] 「しばし待て。」といひて、
 [1188] 「衣着つる人は
 [1189] 心ことになるなり。
 物一言いひおくべき事あり。」
 といひて文かく。
- そのときにかぐや姫。
 しばしまと云。
 きぬきせつる人は
 心ことになるなりと云。
 物一こといひをくべきこと有け
 といひてふみかく。
- [1190] 天人「おそし。」と心もとながり給ふ。
 [1191] かぐや姫
 [1192] 「物知らぬことなの給ひそ。」
 とて、いみじく静かに
 [1193] おほやけに御み文奉り給ふ。
 [1194] あわてぬさまなり。
- 天人をそしと心もとながり給ふ。
 かぐや姫。
 ものしらぬことなの給そ
 とていみじくしづかに。
 おほやけに御文たてまつり給ふ。
 あはてぬさま也。
- [1195] 「かく數多の人をたまひて
 留めさせ給へど、
 [1196] 許さぬ迎まうできて、
 とり率て罷りぬれば、
 [1197] 口をしく悲しきこと、
 [1198] 宮仕つかう奉らずなりぬるも、
 [1199] かくわづらはしき身にて侍れば、
 [1200] 心得ずおぼしめしつらめども、
 心強く承らずなりにしこと、
 [1201] なめげなるものに思し召し
 止められぬるなん、
 [1202] 心にとまり侍りぬる。」とて、
- かくあまたの人を給て
 とどめさせ給へど。
 ゆるさぬむかひまふで来て
 とり出[みてイ]まかりぬれば。
 くちおしくかなしき事。
 宮づかへつかふまつらずなりぬるも。
 かくわづらはしきみにて侍れば。
 心えずおぼしめされつらめども
 心づよく承はずなりにしこと。
 なめげなるものにおぼしめし
 留られぬるなむ。
 心にとまり侍りぬるとて。

- ♪14 [1203] 今はとて
天のはごろもきるをりぞ
君をあはれと
おもひいでぬる
- 〔1204〕 とて、壺の薬そへて、
〔1205〕 頭中將を呼び寄せて
奉らす。
〔1206〕 中將に天人とりて傳ふ。
〔1207〕 中將とりつれば、
〔1208〕 頭中將を呼び寄せて奉らす。
〔1209〕 翁をいとほし悲しと
思しつる事も失せぬ。
- 〔1210〕 この衣着つる人は
〔1211〕 物思もなくなりにければ、車に乗りて
百人許天人具して昇りぬ。
- 今はとて
天の羽衣きるおりそ
君をあはれと
おもひいてける
- とてつぼのくすりそへて。
とうのちうじやうをよびよせて
たてまつらす。
中將に天人とりてつたふ。
中將とりつれば。
ふと天の羽衣打ちせ奉りつれば。
翁をいとをしかなしと
おぼしつることもうせぬ。
- 此きぬきつる人は
物おもひなくなりければ車に乗て。
百人ばかり天人ぐしてのぼりぬ。

15. 不死の薬

- 〔1212〕 その後
〔1213〕 翁・姫、血の涙を流して
惑へどかひなし。
- 〔1214〕 あの書きおきし文を
讀みて聞かせけれど、
〔1215〕 「何せんにか命も惜しからん。
〔1216〕 誰が爲にか何事もようもなし。」
とて、薬もくはず、
〔1217〕 やがておきもあがらず病みふせり。
- 〔1218〕 中將人々引具して歸り参りて、
〔1219〕 かぐや姫をえ戦ひ留めず
なりぬる事を
〔1220〕 こまゝと奏す。
〔1221〕 薬の壺に御文そへて参らす。
- 〔1222〕 展げて御覽じて、
〔1223〕 いたく哀れがらせ給ひて、
〔1224〕 物もきこしめさず、
〔1225〕 御遊等などもなかりけり。
- 〔1226〕 大臣・上達部(かんだちめ)を召して、
〔1227〕 「何(いつれ)の山か天に近き。」
ととはせ給ふに、
- 〔1228〕 或人奏す、
〔1229〕 「駿河の國にある山なん、
〔1230〕 この都も近く
〔1231〕 天も近く侍る。」と奏す。
- 〔1232〕 是をきかせ給ひて、
- ♪15 [1233] あふことも
涙にうかぶわが身には
しなぬくすりも
何にかはせむ
- そののち。
翁女ちのなみだをながして
まどひけれどかひなし。
- あの書をきし文を
よみてきかせけれど。
何せむにか命もおしからむ。
たがためになにに事もようもなし
とて薬もくはず。
やがておきもあがらずやみふせり。
- 中將人々引ぐして歸まいりて。
かぐや姫をえたゝかひとゞめず
なりぬることを。
こまゝと奏す。
薬のつぼに御ふみそへてまいらす。
- ひろげて御覽じて。
いといたくあはれがらせたまひて。
ものもきこしめさず。
御あそびなどもなかりけり。
- 大じむかんだちめをめして。
いつれの山かてんにちかき
ととはせ給ふに。
- ある人奏す。
するがの國にあるなるやまなん。
此みやこもちかく。
天もちかくはむべると奏す。
- これをきかせ給ひて。
- 逢事も
なみたに浮ふわか身には
しなぬ薬も
なにゝかはせむ

- | | | |
|--------|---------------------------------------|--|
| [1234] | かの奉る 不死の薬の壺に、 御文具して | かのたてまつる ふしの薬にまたつぼ[のつぼに 御文イ]ぐして。 |
| [1235] | 御使に賜はず。 | 御つかひにたまはず。 |
| [1236] | 勅使には | ちよくしには。 |
| [1237] | 調岩笠(つきのいはかさ) といふ人を召して、 | 月のいはがさ といふ人をめして。 |
| [1238] | 駿河の國にあなる 山の巔いたゞきに もて行くべきよし仰せ給ふ。 | するがの國にあなる 山のいたゞきに もてつ[ゆイ]くべきよしおほせ給ふ。 |
| [1239] | 峰にてすべきやう 教へさせたもふ(*ママ)。 | 岑にてすべきやう をしへさせ給ふ。 |
| [1240] | 御文 | 御ふみ。 |
| [1241] | ・不死の薬の壺 | ふしのくすりのつぼ。 |
| [1242] | ならべて、火をつけてもやすべき よし仰せ給ふ。 | ならべて火をつけてもやすべき よしおほせ給ふ。 |
| [1243] | そのよし承りて、 | そのよしうけたまはりて。 |
| [1244] | 兵士(つはもの)どもあまた具して 山へ登りけるよりなん、 | つはものどもあまたぐして 山へのぼりけるよりなむ。 |
| [1245] | その山をふしの山とは名づけゝる。 | そのやまをふじのやまとなづけける。 |
| [1246] | その煙いまだ雲の中へたち昇る とぞいひ傳へたる。 | そのけぶりいまだ雲の中へたちのぼる とぞいひつたへけ(たい)る。 |